

夏目漱石『心』研究
―先生の死についての考察―

博士課程前期二年 前田 友美

30
字×
40
行

目次	
序章	… 1
第一章 先生と静	… 2
第一節 「沈んだ心」	… 2
第二節 「御嬢さん」から「奥さん」へ	… 7
第三節 静の愛	… 9
第二章 先生と「私」	… 12
第一節 「私」と両親	… 12
第二節 「同情の糸」	… 14
第三節 「現代」を生きる「私」	… 16
第三章 先生の死	… 20
第一節 Kの死	… 20
第二節 先生の眼	… 23
第三節 先生の遺書	… 25
終章	… 30
注	… 33
参考文献目録	… 42

序章

『心』は「先生の遺書」という題で、夏目漱石によって、大正三年四月二十日から同年八月十一日まで東京・大阪両朝日新聞に掲載された。いわゆる漱石の後期三部作と呼ばれる『彼岸過迄』『行人』に続く作品である。「上 先生と私」「中 両親と私」「下 先生と遺書」の三部から成る。漱石四十八歳、死の二年前の作品である。初出の題が「先生の遺書」であることから、『心』において一番重要な部分は、先生が自分の過去を「私」に遺書という形で伝える、その内容にあるということは窺える。高等学校の教科書にも「先生と遺書」の部分が取り上げられており、私自身高等学校時代に始めて漱石作品に触れたのが、『心』だった。私の高等学校時代の先生の言葉で印象に残っているものがある。それは、『心』で一番不幸なのは静である、というものだった。その時から、語り手である先生や「私」の目線だけでなく、『心』を静の目線から読んでみることの意味を考えるようになった。語り手以外の人物に焦点を当てて作品全体を読み解くという手段を教えていただいたのは、大学の授業においてだった。

『心』の特徴は非常に率直な文章で描かれている点にあると思われる。それは、遺書の中の先生、つまり語り手の、読者へと語りかけるような静かで平易な言葉での淡々とした語り口に理由がみられるのではないだろうか。しかし、その語り口とは裏腹に『心』が訴えるのは心の内面の激しい葛藤であり、発表されて現在に至るまで、読者を揺さぶり続けるものである。確かに『心』は漱石の前期三部作と言われている『三四郎』『それから』『門』と比較すると、読んでいて感嘆させられるような、複雑で精緻な伏線も減少しており、比較的にわかりやすい伏線が多くみられる。だからこそ『心』には、愛することの限界を味わった人間の本当の悲しみや、もう自分には死への道しか開かれていないというような極限の人間の心理がもつとも生々しく描かれているのではないかと考えている。その点に『心』の魅力が潜んでいるのではないかと考えている。第一章では静と先生の関係、第二章では「私」と先生、第三章ではKの死の理由に迫り、先生自身の心の内面についてそれぞれ考察していく。

『心』が岩波書店から刊行されるに際して、漱石は広告文に次のように綴っている。

「自己の心を捕へんと欲する人々に、人間の心を捕へ得たる此作物を奨む
——大正三年九月——」

本論文では、漱石が示そうとした人と人との関わりや心の有り様とは如何なるものであったかを最終的に論究するものである。

『心』以外にも、漱石作品についての研究論文は多数存在し、今でもなお多くの研究者が次々と新しい視点で研究を重ねておられる。私は、漱石がどのような意思を持って『心』を執筆し、位置付けていたかという漱石の視点から、作品を見つめなおしたいと考えている。

第一章 先生と静

第一節 「沈んだ心」

静は先生と深い関わりを持つ人物である。静が『心』の中でどのような役割を果たす人物として描かれているのか、また先生との関係について論究していく。この第一章第一節では静の「沈んだ心」について述べる。押野武志氏は静について次のように述べられている。

漱石は、青年・先生・Kには固有名詞を与えず、静には与えた。先生は、Kと乃木將軍の死を模倣し、青年も先生の生き方（死に方）から何かを学ぼうとした。青年の「私」は遺書のなかの先生Ⅱ「私」に似ている。しかし、静は、何もしくない。固有の存在である。（注1）

静は確かに先生、K、「私」等の主要な登場人物の中ただ一人、名前を与えられている人物である。さらに押野氏は次のように続けておられる。

乃木將軍の静子夫人のように後追い自殺することなく、どこまでもしたたかに生き続ける。陰気な先生がいなくなつて、先生の遺産で悠々自適に暮らす静を想像したい。

先生の死後に静が「先生の遺産で悠々自適に暮らす」ということに關しては共感し難い点もあるが、静が「恐れない女」(注2)であるということと、名前を有すること、一人の固有の人間として『心』の中で浮かび上がってくる存在であるという意見には納得するものである。一方で、秋山公男氏は次のように指摘されている。

奥さんの「策略」及び御嬢さんの「技巧」は、無論先生の叔父によって企まれた悪辣な奸計に比較すれば罪の軽いものであるが、等しく我執に基盤を有することに変わりはない。我執の物語『こゝろ』の登場人物の一人として、御嬢さんもまた我執と無縁ではあり得なかつたというべきであらう。

(注3)

また石原千秋氏は「策略家」としての御嬢さん(静)と奥さん(その母)という見方はようやく定説になりつつある」(注4)と言及されている。

しかし、石原氏が述べられているように、静が「策略」を張り巡らしたことによって、自分の罪を自覚しているならば、先生の苦悩にも気づくはずなのではないか。先生の変化の原因を話し合う場面で、静はKの自殺について次のように「私」に語っている。

「實は私すこし思ひ中ることがあるんですけれども……」

(中略)

「えゝ。もしそれが原因だとすれば、私の責任丈はなくなるんだから、夫丈でも私大變樂になれるんですが、……」

(中略)

「何故其方が死んだのか、私には解らないの。先生にも恐らく解つてゐないでせう。けれども夫から先生が變つて来たと思へば、さう思はれない事もないのよ。」

(中略)

「然し人間は親友を一人亡くした丈で、そんなに變化できるものでせうか。私はそれが知りたくつて堪らないんです。」

(上 十九)

静には『心』全体を通して、用意されている言葉があまり多くはない。その中で敢えて静にこのように言わせるのは、先生の過去の出来事の伏線の役割を果たす以上に、静が本当に、過去の真実を知ることではなく、その心が誠実であるということを証明するためではないだろうか。静の無意識の技巧ともいうべき「笑い」が、学生時代の先生の不信感を煽る結果になつていても、それは先生への恋に起因しているため、罪のある行為だと言うことはできないと考えられる。静を「無意識な偽善家」と呼んだのは寺田健氏である。

漱石が「文学雑話」の中で使っている「無意識な偽善家」なる語については、様々な解釈があるが、私は漱石がその語にすぐ引き続いて、「其の巧言令色が、努めてするのではなく、殆ど無意識に天性の発露のまゝで男を摘にする所」と説明していることを重視したい。すなわち私は、この語は、女性が恋愛行動において無意識的にとる虚偽的な態度をいうが、「男を摘に」しようとする「嬌態」はその典型的な在り方と捉えられている、と考える。(注5)

寺田氏は、静の笑いは無意識であると指摘されており、私も同意するものである。静の人物像について、相原和邦氏は次のように言及されている。

「恋は神聖」という先生のもう一方の恋愛観や、さらに妻を「純白に保存して置いて遣りたい」という愛情の真実も疑えないが、先生自身「塵に汚れ」るのが避けられない人生の姿であることを熟知しており、かつ、眼前の静に対して先に見たような不信の影を拭い切れないのが事実であってみれば、妻のみを「純白に保存して置く」という願望はやはり願望にとどまる観念的な妻の座の掌握にならざるを得ない。静の姿が具体的に書き込まれることが少なく、「美しくい」いい奥さんというだけの抽象的な存在になった根本的な原因は、ここにあると思われる。(中略)

要するに、先生は妻との人間的な理解と連帯を願ひ、もう一歩というところまで接近しながら、その可能性を切り拓くことができず、「世の中にたつた一人住んでゐる」孤独感の中に立ちすくんでいる。もう一歩のところでは孤独の淵にたたまざるを得ないこの先生の姿は、「仕切の襖」に手をかけながらついに語りかけ得なかったKの姿と重なっているのである。さらに、もう一歩という語りかけの可能性を閉ざしたのは、肯定的契機としては「純白」の愛の願望、否定的契機としては不信感をも交えた女性観であり、いずれもきわめて明治的な自己抑制と言えよう。(注6)

相原氏は、先生が静を観念的に捉えていたがために、このような静の人物像が浮かびあがるとされている。静は抽象的な「妻」としての存在でしかない指摘されているが、その一方で静は「私」に次のように語っていることに注目したい。

「あなたは學問をする方丈あつて、中々御上手ね。空っぽな理屈を使ひこなすことが。世の中が嫌ひになつたから、私迄も嫌ひになつたんだとも云はれるぢやありませんか。それと同じ理屈で」

(中略)

「議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白さうに。空の盃でよくあゝ倦きずに献酬が出来ると思ひますわ」

奥さんの言葉は少し手痛かった。然し其言葉の耳障からいふと、決して猛烈なものではなかった。自分に頭腦のある事を相手に認めさせて、そこに一種の誇りを見出す程に奥さんは現代的でなかった。奥さんはそれよりもつと底の方に沈んだ心を大事にしてゐるらしく見えた。(上 十六)

静の「よく男の方は議論だけなさるのね」という言葉が、誰のことを念頭に言っているのかはつきりしないところはあるが、静は父も既に亡くしており、異性の会話を聞く機会といえ、自然、娘時代に限られるのではないか。実際の経験のように語っているところから、かつての先生とKの会話のことを思い浮かべて言っているのではないかと考えられる。男たちが「空の盃」で議論することよりも、自分の「底の方に沈んだ心」を大事にしている静は、本当はこの『心』の中で、誰よりも自分というものが判っている存在として描かれているのではないだろうか。議論だけが飛び交う会話よりも、先生とKが、築き、継続していくことが出来なかつた温かい関係を希求し、大事に思っているのではないだろうか。静の「空の盃」という言葉は先生やKへの痛烈な批判ともとることが出来る。むしろ近代的な高等教育を受けた男性全体への婉曲な抗議としても読み取ることが出来るのではないだろうか。(注7)

静は自分の「沈んだ心」を大事にして、それを誰かに悟らせることをしない。その点から、長い遺書によって、「私」に自分の過去の罪を露わにした先生との相違を読み取ることも可能なのではないだろうか。『心』における静の独自性を強く表すのが、この「沈んだ心」なのではないかと考えられるのである。漱石は静の心を見事に表現していると考えられる。

静は「私」に対して次のように語っている。

「私はとう／＼辛防し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なく云つて下さい、改められる缺點なら改めるからつて、すると先生は、御前に缺點なんかありやしない、缺點はおれの方にある丈だと云ふんです。さう云はれると、私悲しくなつて仕様がななんです。涙が出て猶の事自分の悪い所が聞きたくなるんです」

奥さんは眼の中に涙を一杯溜めた。(上 十八)

静が常に真摯に先生に働きかけていたことが前掲した箇所から窺える。静がするように訴える度に、先生はどうしようもない悲しみに襲われることになる。先生は静をどのような存在として

受けとめていたのだろうか。岩上順一氏は次のように指摘されている。

漱石は先生の妻を近代人の世界には無縁な「純白な」ものと
し、近代とは別の世界の人間としたがっている。(注8)

さらに岩上氏は次のように言及されている。
漱石は彼女もまた先生に劣らぬ近代性をそなえた女であり、
すくなくとも先生とおなじく、どのように醜悪で汚れた自我
であろうと、その自我のありのままの真実において生きよう
とのぞむ女であつたとしていのである。先生は妻がそのよ
うな女であることを知っていた。それを知っていながら、先
生は「私はたゞ妻の記憶に暗黒な一點を印するに忍びなかつ
たから打ち明けなかつたのです。純白なものに一雫の印氣で
も容赦なく振り掛けるのは、私にとつて大變な苦痛だつた」
と言つて、妻を無垢天真な別世界のものの扱いにしてい
つた。

(中略)「私は妻には何にも知らせたくないのです」といつて、
妻を別世界に置こうとしているのである。(中略)漱石は先生
にその妻を天使あつかいさせたきりで、その天使あつかいが
妻への深い不信蔑視であることに氣づかせていない。(注9)

「純白」という言葉は、岩上氏の言われるように、静を先生か
ら遠ざけるものであろうか。その一方で「純白」という言葉から
先生の別の心情も読み取れるとされたのは酒井英行氏である。

細君を「純白」なままに保ちたいという願いは、なにより
も、もはや自分が「純白」ではありえないという、痛切な喪
失感・悔恨に基づいているのだ。「記憶して下さい、あなたの
知つてゐる私は塵に汚れた後の私です。」(下九)という悲し
み、喪失感を秘めているのだ。(中略)この悲しい喪失感があ
るからこそ、「然しまた何うかして、もう一度あゝいふ生れた
ままの姿に立ち帰つて生きて見たいといふ心持も起るので
す。」(下九)といった「純白」(生れたままの姿)への回生の
希求も強いのだ。だから、愛する細君だけは「純白」のまま
であらせたいと願うのだ。(注10)

先生は、既に「純白」ではいられなくなつた自分の姿を顧みて、
静だけは自分と違ふところに置きたかつたのだと酒井氏は述べ
ておられる。

先生は美しい戀愛の裏に恐ろしい悲劇を持つてゐた。そうし
て其悲劇が何んなに見惨なものであるかは相手の奥さんに丸
で知れていなかつた。奥さんは今でもそれを知らずにゐる。

(上 十二)

前掲した「私」の言葉からは、静が今でも先生の死の理由を知
らずにいたことが読み取れる。先生が願つた静の「純白」は守ら

れ、先生が遺書の最後に「私」とした約束は履行されている。自分の死んだ後であっても、Kとの過去を静にだけは知られてはならないという先生の徹底した気持ちには、「人間の為」(下 五十三)という広義の思いやりだけに留まらぬ、一人の人間としての強い気持ちを感じられる。先生は静に生涯自分の過去を隠し続けることで、その愛情を示したのである。しかしそれと同時に次のような問題点も浮き彫りになる。『心』における最大のエゴイズムの表れは、先生が静に過去を告白せずに独りで死んでいったことにあるのではないだろうか。静は、「私」よりも余程強く、先生の変化の理由を「知りたくつて堪らない」(下 十九)と願いながら、それが叶うことはなかった。先生は静に「頓死したと思はれたい」(下 五十六)のであって、自殺だと判るような死に方をするつもりはない。その遺書は「私」宛てであり、決して妻に知らせないように、と釘までさされているのである。先生の死の理由に気づけないまま、たった一人で残される静の結末は、やはり淋しいものである。そして、そのような結末を迎えざるを得なかったのは、先生の静に対するエゴイズムが愛情と表裏一体のものであったためではないだろうか。(注11)

妻はある時、男の心と女の心とは何うしてもぴたりと一つになれないものだらうかと云ひました。私はたゞ若い時ならなれるだらうと曖昧な返事をして置きました。妻は自分の過去を振り返つて眺めてゐるやうでしたが、やがて微かな溜息を洩らしました。(下 五十三)

この遣り取りから、静にとって、過去にも現在にも、先生と心が「ぴたりと一つ」になれた経験がなかったことが「微かな溜息」から伝わってくる。先生はこの時分から、自殺へと向かう「物凄

い閃めき」(下 五十三)を感じずるようになっていく。

第二節 「御嬢さん」から「奥さん」へ

静は「静」という固有名詞を持つているほかに、先生の書生時代には「御嬢さん」と呼ばれ、先生の妻になった時には「奥さん」と呼ばれている。静は、これらの呼び方の表す時間とともに変化している存在なのではないだろうか。先生は書生時代に、御嬢さんとKの仲を疑い、嫉妬の念に苛まれた。奥さんがかつて自分の財産を誤魔化し裏切った叔父と同じような目的で御嬢さんを自分に接近させようとしているのではないかと疑う。御嬢さんに対して先生は次のように感じている。

私の煩悶は、奥さんと同じやうにお嬢さんも策略家ではなからうかといふ疑問に會つて始めて起るのです。二人が私の背

後で打ち合せをした上、萬事を遣つてゐるのだらうと思ふと、私は急に苦しくつて堪らなくなるのです。(中略)それでゐて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑はなかつたのです。

(下 十五)

このような書生時代の先生と同じ状態になつてしまつたのは、先生の奥さんとなつた時の静の心情である。先生への日々の思いを打ち明ける際の静の様子を「私」はこのように叙述している。

疑ひの塊りを其日／＼の情合で包んで、そつと胸の奥に仕舞つて置いた奥さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた。(上 十九)

「疑ひの塊り」を胸に仕舞い込んでゐる静は、書生時代の先生の状態と重なつてゐるのである。「妻が私を誤解するのです。それを誤解だと云つて聞かせても承知しないのです」(上 九)という先生の言葉からも察することができるよう、先生が自分を愛していないのではないかと思ひ込み、苦しんでゐる。

静が「私」に微笑を見せる、次の場面について考察してみたい。先生が世の中に出て活動しない原因を考える場面で、静は先生を心配しながら、微笑を湛えてゐる。

奥さんの語氣には非常に同情があつた。それでも口元丈には微笑が見えた。外側から云へば、私の方が寧ろ眞面目だつた。

(上 十一)

ここでの「微笑」が本心からの笑いであるか、本心からの笑いではないのかという疑問が生じるが、のちに静が「疑ひの塊り」(上 十九)を抱えていることが解るので、この微笑は本心を隠して笑つてゐたことが推測できる。

静の、ただ先生へ恋心を抱いてゐるだけでよかつた娘時代の頃の笑いと、先生の細君となつてからの笑いは種類の異なつたものである。「私は妻のために、命を引きずつて世の中を歩いてゐたやうなもの」(下 五十四)とまで語つた先生の苦悩に気づきながらも、その原因が解らずに、自分では先生を救えないことを悲しんでゐる。細君となつた静が夫である先生に笑いかける描写はあまり見られない。先生が変化しただけでなく、自分までも変化したことに静も気づいてゐる。「妻は自分の過去を振り返つて眺めてゐるやうでしたが、やがて微かな溜息を洩らしました」(下 五十三)という言葉からも、自身の変化を感じ取つてゐることがわかる。米田利昭氏は次のように指摘されている。

誰もが不思議に思う『こゝろ』の静かな文体、何かあるぞと思わせる異常に緊張したあの静かさは、運命によつて罪を負わされた男の悲しみよりも、(純白)のまま群集の中にとじこめられた妻の悲しみに応じてゐる(注 12)

漱石は、書生時代の先生の静への疑念を、妻となった静の先生への疑いへと代えて反復させている。先生は自殺することによって静との訣別を自分で選択することを可能にした。しかし後に残された想像される静の姿は、米田氏の言われる通り、あまりに淋しいものである。静は御嬢さんでいられた頃の自分と訣別し、先生の細君となった今の自分と必死に向き合おうとしているのである。「Kさんが生きてゐたら、貴方もそんなにはならなかつたでせう」(下 五十二)と投げかける静に、Kとの過去を話し、「理解させる手段があるのに、理解させる勇氣が出せない」(同)先生は詫びることしかできない。

私は時々妻に詫まりました。それは多く酒に酔つて遅く歸つた翌日の朝でした。妻は笑ひました。或は黙つてゐました。たまにぼろ／＼と涙を落すこともありました。(下 五十三)

先生の奥さんとなった静の笑いの背景には何時も悲しみがあつた。そこでは先生に好意を持つゆえに起つていた娘時代の笑いは影を潜め、生身の姿で先生へと直接に果敢に疑問を投げかけ、答えを得られず、傷つき、愛されたいと願う一人の女性の姿が浮き彫りになっている。先生の遺書に記された、静の最後の笑いは、明治天皇の崩御の報せを先生が受け取る場面に見られる。

最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。

私は明白さまに妻にさう云ひました。妻は笑つて取り合ひませんでした。が、何を思つたものか、突然私に、では殉死でもした可からうと調戲しました。(下 五十四)

皮肉にも、『心』に描かれた、静の最後の笑顔の言葉を受けて、ついに先生は死を実行に移すのである。

第三節 静の愛

第二節で静の変化について述べてきたが、静が過去でも現在でも先生を愛していたことには変わらない。静の愛が一途であればあるほど、Kの面影に苦しめられる先生は、次第に居場所をなくしていく。先生は自分自身の中に苦しみの原因を発見したために、静に伝えて、楽になることができな。夫婦の姿が描かれている作品のうち、『門』と『道草』を例にとって夫婦の形を見してみる。『門』においては共通の罪による苦しみを抱えながらも、全てを分かち合うことのできない夫婦の姿が描かれている。宗助はお米に安井がすぐ側まで接近している事実を最後まで伝えることができない。『道草』の御住の健三へと向けた「あなたは誰も何にもしないのに、自分一人で苦しんでゐらつしやるんだから仕方が

ない」(二十一) という言葉は、先生とKの過去を知らない静にとって、先生に対しての同じ心境を表すものと言えるだろう。しかし『道草』では次のような文章も見られる。

離ればいくら親しくつても大切になる代りに、一所にゐさへされば、たとひ敵同士でも何うにか斯うにかなるものだ。つまりそれが人間なんだろう。(六十五)

この健三の言葉から、『心』とは夫婦の有り様の捉え方が変わっていることに気が付く。『道草』は悲劇で終わらない作品である。健三と御住が見つめるものは最後の場面で交差することはない。しかしそれでも二人の日常が断絶することはなく、先生の死によって未来を絶たれてしまった『心』の夫婦とは異なった、漱石の許しのようなものがみられるのである。

静は先生を愛している。だからこそ先生にとって静を愛することとは、生の方向へ自らの足を向かわせることだった。先生が「実は奥さんに何もかも期待していなかった」(注13)とされたのは熊坂敦子氏だが、本当にそのように言い切れることは可能なのだろうか。静の愛は先生に何の影響も与えないものだったのか。江藤淳氏は次のように述べておられる。

小宮豊隆氏をはじめ、多くの優れた注釈家や伝記作者の熱心な努力にもかかわらず、「心」、「道草」、「明暗」の三つの作品を通じて、漱石は明らかに「愛」の可能性を探索するより、その不可能性を立証しようとしている。(注14)

江藤氏の言われていることは『心』という作品の結末から見ると確かに首肯できるものであるが、「漱石が明らかに愛の不可能性を立証しようとした」という箇所になる点がある。

先生と静は、『行人』の一郎と直にみられるような見合い結婚ではなく、お互いが好意を持ったうえの結婚であることから、恋愛結婚の形に近いと思われる。先生が下宿に來た当初、上手ではないけれど、静は琴を奏でて聴かせ、先生の部屋の床を色々の花で飾ってみせている。それに対し、先生は次のように感じている。

私は喜んで此下手な活花を眺めてはまづさうな琴の音に耳を傾けました。(下 十一)

静の作法が完璧であつたなら、先生はここまで喜ばなかったであらう。この場面には、静の、娘らしい、誠実な不器用さと、それに対し、至極自然に安らぎを感じている先生の姿が、はっきりと描かれている。静もまた、先生に喜んでもらいたかつたのである。静は先生に好意を示し、それに先生は応えている。頑なだつた先生の心をほぐしたのもやはり静だったのである。打算も何もない、先生に対する静の愛情が描かれている場面であるといえるだろう。先生が愛の可能性を模索する様子は十分に描かれている

のではないだろうか。遺書を書いている現在でも、先生は、「私は今でも固く信じてゐるのです。本當の愛は宗教心とさう違つたものでないといふ事を固く信じてゐるのです。」（下 十四）と「本當の愛」を尊いものと捉えていることが窺える。

先生の叔父が自分の娘と先生との結婚を勧めた時に、先生は次の理由で断つてゐる。

従妹は泣きました。私に添はれないから悲しいのではありません。結婚の申し込を拒絶されたのが、女として辛かつたからです。私が従妹を愛してゐない如く、従妹も私を愛してゐない事は、私にもよく知れてゐました。（下 六）

また、先生は次のようにも言つてゐる。

此方でいくら思つても、向ふが内心他の人に愛の眼を注いでゐるならば、私はそんな女と一所になるのは厭なのです。（下 三十四）

男女の間に愛情がなければ、結婚をすることはできない、と先生が考へていることが分かる。しかし、先生がKを出し抜こうとして、奥さんに静との結婚を申し込んだことも紛れのない事実である。それは自分が静に好意を持たれてゐるという実感がないままの行動であつた。静に対して次のように思つてゐたのにも関わらずである。

私は其人に對して、殆ど信仰に近い愛を有つてゐたのです。

（中略）もし愛といふ不可思議なものが両端にあつて、其高い端には神聖な感じが働いて、低い端には神聖な感じが動いてゐるとすれば、私の愛はたしかに其高い極點を捕まへたものなのです。（下 十四）

静に恋する気持ちに對して、「信仰」や「神聖」という言葉を用い、結婚に對して慎重であつた先生が、Kへの嫉妬に起因して行動を移したことが、修復不可能な亀裂を起こしたのである。静との結婚生活を送りながらも、最終的に先生が自殺へと向かつていく理由については第三章にて論じていきたいと思う。

第二章 先生と「私」

第一節 「私」と両親

「私」は先生の影響を強く受けた人物である。第二章の第一節では、「私」が両親、特に父から受けた影響が、『心』の中で、どのような役割を果たしているかについて考察する。「私」が無意識のうちに自分の父と先生とを比較している描写は次のようなものがある。

私は心のうちで、父と先生を比較して見た。両方とも世間から見れば、生きてゐるか、死んでゐるか分らない程大人しい男であつた。他に認められるといふ點からいへば、何方も零であつた。それでゐて、此将棋を差したがる父は、單なる娯樂の相手としても私には物足りなかつた。(上 二十三)

次に挙げるのは、「私」の大学の卒業証書を前にした時の二人の反応である。先生と父を比較しながら、「私」は次のように思う。

私には口で祝つてくれながら、腹の底でけなしてゐる先生の方が、それ程にもない物を珍しさうに嬉しがる父よりも却て高尚に見えた。私は仕舞に父の無知から出る田舎臭い所に不快を感じ出した。(中 一)

このような「私」の父の様子の方で、先生は自身の卒業証書を何処かに仕舞い忘れてしまつてゐる。(注 15) 先生が自分の權威にこだわることをしない性質がここから伝わってくる。「私」が先生から遺書を受け取り、東京へ向かうとする場面へ向けて、「私」が先生と父を比較し、先生の考え方の方へ惹き付けられていく描写は次第に増えていく。しかし先程挙げた「中 一」での「私」の卒業証書を巡る場面で、「私」が次のように思つてゐることに留意すべきであると思われる。

私は一言もなかつた。詫まる以上に恐縮して俯向いてゐた。父は平氣なうちに自分の死を覺悟してゐたものと見える。しかも私の卒業する前に死ぬだらうと思ひ定めてゐたと見える。其卒業が父の心に何の位響くかも考へずにゐた私は全く愚ものであつた。(中 一)

その時の「私」には、腎臓の病氣で永くしないと自覺している父が、自分が無事に大学を卒業した事を心から喜ぶ気持ちが見えていなかったのである。父に対して「私」がこのように思つたのは、年を重ね、手記を書く現在の段階になつた「私」が、やはり肉親の情とも言うべき血の繋がりを感じ取つて、今でも悔やまれるような感覚を持ち続けているということが考えられるだろう。先生の考え方に傾倒するあまり、父親が息子の卒業を祝う、いわば当然の心情が「私」にはすぐに分からなかつたということ、下宿時代の先生が、御嬢

さんの自分に対する好意に気が付かなかったという事実とも関連しているのではないだろうか。(注16)

先生と「私」の父の大きな相違点として考えられるのは、自分の死に対する受け止め方であると思われる。先生は「私」に「君のうちに財産があるなら、今のうちに能く始末をつけて貰って置かないと不可ないと思ふがね」(上 二十八)と忠告している。その一方で「私」の父については次のような描写がなされている。

父は自分の眼の前に薄暗く映る死の影を眺めながら、まだ遺言らしいものを口に出さなかつた。(中 十六)

自分の死を身近に意識している先生と違って、「私」の父は眼前に迫る死の恐怖を受け止めかねていると考えることが出来る。(注17)しかし、先生、「私」の父のそれぞれの死によって、後に残される妻の心情は大きく異なっていると考えられる。夫を看取ることが出来るお光と異なつて、静は夫を看取ることはおろか、夫の死の本当の理由さえ知ることとは出来ないのである。静とお光の二人に共通して遺されるものは家である。その一方で、お光に子供があり、静にはいないということも大きな相違点であるといえよう。(注18)

「中 一」と同じ場面で「私」の卒業証書について次のような描写が見られる。

證書は何かに押し潰されて、元の形を失つてゐた。父はそれを鄭寧に伸した。

「こんなものは巻いたなり手に持つて来るものだ」

「中に心でも入れると好かつたのに」

と母も傍から注意した。(中略)一旦癖のついた鳥の子紙の證書は、中々父の自由にならなかつた。適當な位置におかれるや否や、すぐ己れに自然な勢ひを得て倒れやうとした。(中 一)

この場面から、「私」の父と母が、ほとんど気持ちと同じくする人物として描かれているということが言えよう。その一方で、この卒業証書の「己れに自然な勢ひを得て倒れやうとした」という擬人法的な表現に「私」が、両親でなく、先生と同調していく様子が描かれていると思われる。「私」は、父や兄の言いなりになることなく、家から独立して、自分なりの生き方を模索していくのではないだろうか。手記を書いている現在の「私」の様子を暗示している表現であると考えられる。卒業証書という一つの物に対して、「私」が先生と父の両方の考え方の中間にあつて、揺らいでいるのが窺えるのである。また、先生と「私」に共通して見られる表現の一つとして、「遠眼鏡」が挙げられる。

然し東京へ修業に出たばかりの私には、それが遠眼鏡で物を見るやうに遙か先の距離が望まれる丈でした。(下 五)

下宿の二階の窓をあけて、遠眼鏡のやうにぐる／＼巻いた卒業

證書の穴から、見える丈けの世の中を見渡した。(上 三十二)
先に挙げたのが先生で、後が「私」であるが、先生は自分が叔父
によつて早く父の後を相続しろと迫られていることに実感を得られ
ないという場面であり、「私」は大学を卒業したばかりで、自分の進
路を漠然としか考えることができないという場面である。「遠眼鏡」
という表現が共通して表していることは、先生と「私」が、現実に
対して正面から受け止めきれず、共に狭い視界の中でフィルターを
通した世の中しか見えていないということであろう。先生も「私」
も共にかつての自分に対して述懐を込めた表現であることが窺える。
(注 19)
「私」と先生の関係について三浦泰生氏は次のように指摘されて
いる。

私と父とが肉体上の親子であるならば、私と先生は正に精神上
の、あるいは魂の上での親子に他ならなかった。(注 20)
三浦氏が指摘された通り、「私」は、先生の考え方の影響を強く受
けて、変化していく人物であり、「私」が先生を心から慕っている
ということは疑いようのない事実である。その一方で、成人する前
に両親を喪い、叔父の財産の誤魔化しに遭つて、故郷を喪失した先生
と異なつて、田舎という故郷を持つ「私」には、やはり血の繋が
りを持つた父の存在を、先生に比べて軽視するということとは出来
ないと思われる。「私」が、先生の影響を強く受けながらも、完全
に先生と立場が一致する存在ではないという相違が何を表しているのか。
もう少し考察を進めていきたいと思う。

第二節 「同情の糸」

第二節では先生と「私」の関係を表す、「同情の糸」という言葉に
注目する。

今考へると其時の私の態度は、私の生活のうちで寧ろ尊むべき
ものゝ一つであつた。私は全くそのために先生と人間らしい温
かい交際が出来たのだと思ふ。もし私の好奇心が幾分でも先生
の心に向つて、研究的に働き掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の
糸は、何の容赦もなく其時ふつりと切れて仕舞つたらう。(上
七)

ここでの「同情の糸」の「同情」は、相手に対する憐憫の情を含
んだ上から下への感情ではなく、気持ちと同じくするもの、という
意味で使われている。(注 21)『心』の冒頭で、「私」が先生に対して
「私は其人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」と云ひたくなる。」
(上 一)と言っていることから、「私」が先生に対して抱いている
感情は、尊敬の念を含んだものであることがわかる。「私」と先生が

このように強く結びつくことができたと感じた瞬間は、次の場面ではないかと考えている。先生は「私」に次のように問い掛ける。

「あなたは本當に眞面目なんですか」

(中略)

「私は死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる。あなたは其たつた一人になれますか。あなたは腹の底から眞面目ですか。」(上 三十一)

ここで「私」が次のように答えたことが、重要だったのではないだろうか。

「もし私の命が眞面目なものなら、私の今いつた事も眞面目です。」私の聲は顫へた。

(上 三十一)

先生が「私」を眞面目だと認め、遺書を託したのは、「私」が声を「顫」わせながら、先生の過去を知るためなら、自分の「命」を引き合いにできるといふ覚悟を感じ取ったからであろう。だからこそ、自分も命を懸ける覚悟を決めたのである。

私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔の浴びせかけやうとしてゐるのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。(下 二)

先生の「巻煙草を持つてゐた其手が少し顫へた」(上 三十一)とていう「顫へ」は私へと伝染し、共鳴していくものである。先生にとつて過去とは現在の自分を構成する原因そのものであつた。先生は、今なお自分を苛み続ける暗い過去の中から「眞面目に人生そのものから生きた教訓を得たい」(下 二)と言つた「私」の言葉を受けて、遂に自分の過去を眞正面から受け止める覚悟を得たのである。先生は、正面から自分に向き合つて、その傷口を見たいと言つてくれる人物が現れたことに心から驚き、恐れ、また喜びに「顫」えたのではないだろうか。先生との間を阻む壁が先生の過去にあると「私」は気づき、その壁を破ろうとした。それほどの意味を、「私」の発言は持つものである。静にはどうしても話す訳にはいかなかった自分の過去の罪を、告げる相手に出会えたことが、先生の心を震わせたのではないだろうか。先生と「私」の関係を竹盛天雄氏は次のように言われている。

手記は若い「私」が自分を挑発者に仕立てて「先生」を告白に追い込む経緯をたどりなおしているが、「先生」は、そのような挑発者を待ちのぞんでいたともいえ、むしろ誘惑者と呼ぶのが適当かもしれない。(注 22)

「私」の存在は先生にとっては待ち望んでいた人物であるといふことができるが、竹盛氏のように、「私」を果たして「誘惑者」と呼ぶことができるだろうか。「私」はもつと「單純」(上 三十一)、だ

ったのではないだろうか。先生が「私」に対して次のように言っていることも見逃してはならない点だと思われる。

たゞし受け入れる事の出来ない人に與へる位なら、私はむしろ私の経験を私の生命と共に葬った方が好いと思ひます。實際こゝに貴方と云ふ一人の男が存在してゐないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでせう。(下 二)

しかし、「私」と本当に心が繋がったと思われた瞬間に、同時に先生は自分の死を明確に意識し始めるようになる。

「よろしい」と先生が云った。

「話ませう。私の過去を残らず、あなたに話して上げませう。

其代り……いやそれは構はない。(後略)」「(上 三十一)

先生はこの場面において、自分の死を目前に意識したといえるだろう。私が記した「同情の糸」の「糸」とは、切望しつつ長いこと得られなかったが、時を経て、漸く繋がった、確かな関係の比喩であるのかもしれない。それと同時に、先生の死の影によつて不安定にならざるを得なかった、二人の関係を表す表現であるといえよう。

第三節 「現代」を生きる「私」

『心』の中には「現代」という言葉が多く見られる。漱石が時代性を意識して書いたのは確かだろう。先生は次のように「私」に語っている。

「自由と獨立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はなくてはならないでせう。」(上 十四)

「私」と先生の考える「自由と獨立」の意味について山崎正和氏は次のように論じられている。

彼らの自由は他人を支配する自由ではなく、いかなる他人からも支配と制肘を受けない、という意味での自由にすぎないといえる。(中略)彼らはほとんど病的なまでに、人間関係のなかで純粹な主体であることに徹しようとしている。(注²³)

山崎氏は、先生と「私」が、家という枠組を超えたところに、自分の生きる道を確立しようとする模索している点について関心を持たれている。それは実家からも養家からも離れて、独力で生きていこうとしていたKについても同様のことが考えられるであろう。

「現代」とは、先生及びKの世代、「私」の世代を含めた、一つの時代を表すものである。かつて先生に淋しいかと聞かれ、「ちつとも淋しくはありません」(上 七)と答えた「私」ではあったが、田舎の故郷にいる間に、次第に淋しさを感じるようになっていく。しか

し、先生の淋しさと、「私」の淋しさは必ずしも重なるものではないと指摘されたのは関谷由美子氏である。

「私は淋しい人間です」と「先生」は繰り返す。しかしその〈淋しさ〉の性質は「たつた一人で淋しくつて仕方が無くなつた結果」「所決」(「先生の遺書」(五十三))へと向つてゆくような、人間に背を向けたものである。その淋しさは「私」のように、他者との共生を願う、人間の本性に根ざした〈生〉の方向を指す〈淋しさ〉と明らかに対照されている。(注²⁴)

先生の淋しさと「私」の淋しさは、関谷氏の言われる通り、厳密には異なるものだと思われる。少なくとも「私」は先生の過去を知つた上で、先生と「温かい交際」(上 七)が出来たと感じているからである。遺書の終盤で時代性を意識した、「時勢」という言葉がいくつか登場する。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな氣がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。

(下 五十五)

(中略)

私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに貴方にも私の自殺する譯が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もし左右だとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方があります。或は個人の有つて生れた性格の相違と云つた方が確かかもしれません。(下 五十六)

「時勢」とは、先生と「私」の差異化を図るための言葉ではないかと思われる。(注²⁵)それは、先生の影響を受けるばかりの存在で終わらない「私」の生き方を暗示させるものである。関谷氏は「私」と先生について次のように言われている。

「私」は瀕死の父を見捨てて「先生の安否」(十八)を確かめるために汽車に飛び乗つてしまふ。しかし「私」はこの時「先生」と父とを〈取捨選択〉したのではない。〈自然の衝動〉が「私」を突き動かし「突然立つて」「夢中で」「思ひ切つた勢で東京行の汽車に飛び乗つてしまつた」のである。この一つの〈衝動的行為〉が産み出す、現実の大きいなる不可測性のうちに手記は〈中断〉という形で終つてゐる。それに対して、〈遺書風の手紙〉は、それを書いた「私」が、人生の決定的瞬間において、このような〈自然の衝動〉が唯の一度も訪れることのなかつた人物であることを示しているのである。(注²⁶)

関谷氏の指摘された通り、先生にとつての「自然」は多くの場合において遮られているといえる。それは次に挙げる、先生が、Kが

大学へ行っている間に、仮病を使って機会を作り、御嬢さんに結婚を申し込んだ場面に如実に表れているといえよう。

彼は

「病氣は、もう癒いのか、醫者へでも行つたのか」

と聞きました。私は其刹那に、彼の前に手を突いて、詫まりたくなつたのです。しかも私の受けた其時の衝動は決して弱いものではなかつたのです。もしKと私がたつた二人曠野の眞中でも立つてゐたならば、私は吃度良心の命令に従つて、其場で彼に謝罪したらうと思ひます。然し奥には人がゐます。私の自然はすぐ其處で喰ひ留められてしまつたのです。さうして悲しい事に永久に復活しなかつたのです。(下 四十六)

この場面について酒井英行氏は次のように述べておられる。

人間が人間として生きていくかぎり、「曠野の眞中」などという状況がありえるのか。「奥には人がゐます」という状況にあることこそが、他者との関係の中でしか生存できない人間の宿命である。(注²⁷)

「奥には人がゐます」という言葉が表すものは、酒井氏の言われるとおり、他者との関係の中で生きる人間の宿命であり、『心』の中で一貫して流れる一つの主題といえるのではないだろうか。(注²⁸)

先生がKに直接に御嬢さんとの結婚のことを伝えられていたら、大きく状況は変わったと考えられるからである。

先生には人生の決定的瞬間において訪れることのなかつた(自然の衝動)が、「私」に働いたために、「私」は鎌倉の海で先生を見つけ出し、ごく自然に興味を持つようになり、「温かい」(上 七)と思える関係を築くことができたのである。(注²⁹)

これまで「然し私の過去はあなたに取つて夫程有益でないかも知れませんか。聞かない方が増かも知れませんか」(上 三十一)と「私」に言っていた先生の心情は、「私の過去は私丈の経験だから、私丈の所有と云つても差支ないでせう。それを人に與へないで死ぬのは、惜いとも云はれるでう。私にも多少そんな心持があります。」(下 二)という心情になり、「何千萬とある日本人のうちで、たゞ、貴方丈に私の過去を物語りたい」(下 二)という気持ちに変化して、遺書の最後では、「私は私の過去を善悪ともに他の参考に供する積です」(下 五十六)というように、「私」一人に向けたものから、次第に、更に不特定多数の人へと向けたものへと遺書を昇華させているのである。その点から、受け取り手である「私」の存在によつて、先生にとって遺書が意味のあるものへと変化していったことが窺える。

「私」が生きる「現代」という時代は何を表すものなのだろうか。相原和邦氏は次のように言われている。

「行人」においては性格の違和を中核としつつ、最後にそこに近代という時代の「宿命」が捉えられ始めていた。「こゝろ」に至ると、そこに「有つて生れた性格」と「時勢の推移」の問題があるという形で、個人と時代を統合する目が発見されている。前近代を引き継いだ「明治の精神」と大正以後に通う「自由と獨立と己れとに充ちた現代」はともにK・先生・「私」の特殊な個性を媒介としつつ、それをこえた時代精神の顕現にもなり得ている。(注³⁰)

先生が「私」に語りかける「現代」という言葉の先には、「私」と同じ時代に生きる人々がいた。先生の遺書は明治という時代の終焉とともに、新しい時代の始まりを示唆しており、同時に危惧の念も帯びている。

先生と「私」は別の人間である。だからこそ、先生の言葉や、その生き方をしっかり見つめることが、「私」には可能なのである。田舎に故郷を持ち、財産を奪われる心配をしたことのない「私」に、先生は自分との相違を見出した。「私」は先生の遺書を受け取り、自然の衝動によって、危篤の父を置いて、東京にいる先生のもとへと向かった。「私」には、近代的な高等教育を受けたという先生との共通点も見られるが、「私」という人物は、先生が、自身もそうでありたいと願って、得られなかった、自然の感情を持ち、自然の感情で動くことの出来る青年だったのである。先生よりも少しだけ未来を生きていくはずの「私」であり、田舎の父の影響を受けた「私」であるからこそ、先生と別個の人間であったがために、先生への興味を抱くようになり、先生が命を絶った現在でも、むしろ、より一層慕う気持は薄れていないのである。

これまで、第一章では静と先生、第二章では「私」と先生との関係について述べてきたが、続く第三章では、先生の死の理由を中心に、Kの死の理由とともに、論じていくつもりである。

第三章 先生の死

第一節 Kの死

Kは先生と同じく、故郷の喪失者であると言うことができる。Kは養子に出されたという過去を持ち、先生は二十歳になる以前に両親を喪い、Kは母親を既に喪っている。(注31)先生は故郷の叔父に財産を誤魔化されて、裏切られ、故郷をあとにした。一方で、Kは養家から送られる学資を自分の道のために使用し、その結果、実家からも離籍という処置を取られている。Kは自分の居るべき場所を、実家と養家で合わせて二度失うという結果になったということができる。Kの第三の居場所とも言い換えることができる、先生に連れて来られた下宿先においても、Kは自殺という形で、自分の居場所から永遠に去るのである。

先生には「私はKと一所に住んで、一所に向上の路を辿って行きたい」(下 二十二)という気持ちを抱いて下宿先へとKを連れてきた責任があった。(注32)次の文章からも先生の強い気持ちが窺える。私が孤獨の感に堪へなかつた自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤獨の境遇に置くのは、私に取って忍びない事でした。

一步進んで、より孤獨な境遇に突き落とすのは猶厭でした。(下 二十四)

先生がこのように思っていたのにも関わらず、Kを「より孤獨な境遇」(同)にしたのは他ならぬ先生自身であった。言うまでもなく、Kの死は『心』全体に暗い影を投げかけている。Kが最初に死を意識したのは何時であったのか。それは先生と房州を旅した時のことであつたと考える。

ある時私は突然彼の襟頸を後からぐいと攫みました。斯うして海の中へ突き落したら何うすると云つてKに聞きました。後向の儘、丁度好い、遣つて呉れと答へました。私はすぐ首筋を抑へた手を放しました。(下 二十八)

「私は自分より落付いてゐるKを見て、羨ましがりました」「同」とあることから、先生には、Kが御嬢さんへの恋心を萌し、死を意識する程までに悩んでいたことがわからなかつたのである。(注33)

「自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺する」(下 四十八)というのがKの遺書の内容である。その中で先生がもつとも痛切に感じたのは次の文句である。それは「最後に墨の餘りで書き添へたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのに何故今迄生きてゐたのだらう」(同)という言葉だった。ほんのおまけのように「墨の餘り」(同)で書き添えられたその言葉にKの本心が垣間見える。

本当は書かなくてもよいことだと自分でも分かっていたのに、書かずにはいられなかった言葉なのだろう。

次にある場面を引用する。Kが先生から「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」(下 四十一)という言葉を受けた夜のことである。

私は程なく穏やかな眠りに落ちました。然し突然私の名を呼ぶ聲で眼を覚めました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、其處にKの黒い影が立ってゐます。(中略)其時Kはもう寝たのかと聞きました。Kは何時でも遅く迄起きてゐる男でした。私は黒い影法師のやうなKに向つて、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、たゞもう寝たか、まだ起きてゐるかと思つて、便所へ行つた序に聞いて見た丈だと答へました。Kは洋燈の灯を背中に受けてゐるので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分りませんでした。けれども彼の聲は不斷よりも却て落ちついてゐた位でした。Kはやがて開けた襖をぴたりと立て切りました。(下 四十三)

この場面における「襖」については、越智治雄氏によつて「それまで単に日常的な意味しか担つていなかったこの仕切りはほとんど象徴の域に近づいてくる。一枚の襖は先生とKとを隔てる厚い壁なのだ」(注34)と既に指摘されている。Kはこの時、どのような心情でいたのだろうか。相原和邦氏はこの場面において次のように述べられている。

お嬢さんとの恋の問題を離れた、もつと高次の問題について語り合いたかつたことが推察される。(中略)先生の裏切り行為を知つたにも拘わらず、Kが自殺する晩も、全く同じように仕切の襖を開けているとすれば、Kはこの前の晩から引き続いた問題、恋の得失や友人の裏切り等を超えた人間存在の根本的な矛盾と生の孤独と寂寞をこそ語りたかつたのではあるまいか。

(注35)

Kは、相原氏の指摘された通り、先生とただ語り合いたかつたのであろう。自分の淋しさを、自分の声で先生に告げようとしたが、ついに出来なかつたのである。

越智氏が指摘された「襖の仕切」とともに「火鉢」も、先生とKを隔てるものとして描かれているのではないだろうか。用例を次に挙げる。

①私は書物を読むのも散歩に出るのも厭だつたので、たゞ漠然と火鉢の縁に肱を載せて凝と顎を支へたなり考へてゐました。

(下 三十五)

②するとKの方からつか／＼と私の座敷に入つて来て、私のあたつてゐる火鉢の前に坐りました。私はすぐ両肱火鉢の縁から取り除けて、心持それをKの方へ押し遣るやうにしました。(下

三十五)

③私はKが室へ引き上げたあとを追い懸けて、彼の机の傍に坐り込みました。さうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑さうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いてゐたでせう、私の聲にはたしかに得意の響があつたのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳した後、自分の室へ歸りました。(下 四十三)

一般的に、襖の仕切を開けて互いが互いの部屋に入り、一緒に「火鉢」の前に手を翳すという行為は、腹を割って話せる親しい間柄にあるからこそ、自然に出来る行為であると思われる。②はKがお嬢さんへの恋を打ち明ける場面である。それはKが先生を信頼したために自分の気持ちを打ち明けることができたのであろう。しかし、③の場面では、互いに火鉢の前に手を翳しながら、先生とKはお互いの心中をまるで察していない。Kは「迷惑さう」にしているだけで、何も言おうとはしていない。かつて先生に御嬢さんへの気持ち打ち明けた火鉢の前では、もう先生と話すことは出来ないのである。越智氏が示されたように、「仕切の襖」という物自体が、先生とKの間の心の境界線ともいえる働きをしている。その一方で「火鉢」は、表向きには二人が一緒に手を翳すという行為と真逆の心中を表すものとして描かれていると考えられる。つまり「火鉢」は、外面的には、先生とKが同じ空間の中に居り、間近くで話しているが、内面で生じてしまう、その心の決定的な擦れ違いを表す手段として用いられているのではないだろうか。②と同じ場面で、先生とKは互いの様子が見えていないことがわかる。

恐らく其苦しさは、大きな廣告のやうに、私の顔の上に判然りした字で貼り付けられてあつたらうと私は思ふのです。いくらKでも其處に氣の付かない筈はないのですが、彼は又彼で、自分の事に一切を集中してゐるから、私の表情などに注意する暇がなかつたのでせう。(下 三十六)

自分の告白に必死になつてゐるKには先生の表情が分からず、一方で先生は「半分何うしやう」といふ念に絶えず掻き亂されてゐましたから、細かい点になると殆ど耳へ入らないと同様(同)なのである。この描写から、友人の心に無関心な、愛情についてのエゴイズムが先生とKの二人ともに見られるのである。

Kの死は、自己の中に利己心を見つけてしまったために起こつたものであると考えている。「求道」という自らの「精進の道」を、全てを犠牲にして貫き通すことを信念としていたのに、恋愛の情に囚われて、「精神的な向上心」(下 三十)を表す「智」よりも「人間らしい」(下 三十一)、「情」の方に心を傾けた時、自身の中にはつきりとした矛盾を感じ取つたのであろう。(注 36) 先生が御嬢さんに

結婚を申し込んだと知った時、Kは先生の気持ちに気がつかなかったことに最も驚愕したのではなかっただろうか。重松泰雄氏は次のように指摘されている。

先生はかつて「私」に、「自由と独立と己れとに充ちた現代」に生まれ、たわれわれは、その犠牲として「淋しみ」を味わわねばならぬだろうと語ったことがある（「先生と私」十四）。このことばを借りて言えば、Kが先生を思いやる余裕がなかったのは、何よりもKが「己れ」に「充ち」ていたからにほかなるまい。その点、先生の卑劣な行動と根は同じだとも言えるので、程度の差こそあれ、Kの側にも「罪」はけつしてなかったわけではないのである。（注³⁷）

Kの所決の理由について重松氏は次のように続けておられる。「世の中で自分が最も信愛してゐるたつた一人の人間すら、自分を理解してくれない、世の中にたつた一人住んでゐるやうな氣」（「先生と遺書」五十三）に陥ったとき、彼が、「思ひがけぬ心」ならぬ、「吾意志の欲する所に従」うことのできる唯一の手段――「所決」によつて、かつての「尊とい過去」、むしろ尊かつた過去への回帰を果たそうと考えたとしても不審はあるまい。

（傍点原文）（注³⁸）

しかしKに罪があるとすれば、該当するのは、養家を欺いたことのみではないだろうか。先生の気持ちに気がつかなかったことで、己を責める必要があるのだろうか。Kが先生と御嬢さんとの結婚を知った時に生じた感情は、憤りでもなく、ただ途方も無く大きな淋しみだった。Kもまた「淋しかった」のであろう。他者の心が、自分に全て分らないように、自分の心もまた他者には伝わることがない、ということに唐突に気づかされたのではないだろうか。Kの自殺は、他者との関係において、自分のことだけしか考えることが出来ないという、ある意味で、人間の、人間たるところの表出に深く感じ入り、絶望したためのものであると考える。自分に最も近いとも言える存在でさえも、心を互いに全て理解し合うことは難しく、擦れ違いや誤解による悲劇までも生みかねないという危険性をKの死は訴えている。

第二節 先生の眼

先生がKの自殺を知る場面は次のような描写がなされている。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、恰も硝子で作った義眼のやうに、動く能力を失ひました。私は棒立に立竦みました。それが疾風の如く私を通過したあとで、私は又ああ失策つたと思ひました。もう取り返しが付かないといふ黒い光が、私の未

来を貰いて、一瞬間に私の前に横たはる全生涯を物凄く照しました。さうして私はがた／＼顫へ出したのです。(下 四十八)先生の眼が「恰も硝子で作った義眼」(同)となるということは、視覚を失い、眼の機能を果たさなくなるということを表している。「心」の中では、「眼」を使った熟語が意図的に用いられている。その例を挙げていきたいと思う。

①色氣の付いた私は世の中にある美しいものゝ代表者として、始めて女を見る事が出来たのです。今迄其存在に少しも氣の付かなかつた異性に對して、盲目の眼が忽ち開いたのです。(下七)

②Kと私は細い帯の上で身體を替せました。するとKのすぐ後に一人の若い女が立つてゐるのが見えました。近眼の私には、今迄それが能く分らなかつたのですが、Kを遣り越した後で、其女の顔を見ると、それが宅の御嬢さんだつたので、私は少からず驚きました。(下 三十三)

③悲しい事に私は片眼でした。私はたゞKが御嬢さんに對して進んで行くといふ意味に其言葉を解釋しました。果斷に富んだ彼の性格が、戀の方面に發揮されるのが即ち彼の覺悟だらうと一圖に思ひ込んでしまつたのです。(下 四十四)

「盲目」「近眼」「片眼」のいずれも、視界が不自由で、視力の不完全な様子を表している。その最たるものが、「義眼」という表現にあるといえよう。視力は最早完全に失われ、造りものの硝子へと成り果ててしまつているのである。先生には、自分が関わつた物事や、その時の他の人の氣持ちも見えてはいなかつたことが分かる。Kの真意を読み取ることができない様子は次のような場面に見ることができる。

「馬鹿だ」とやがてKが答へました。

「僕は馬鹿だ」

Kはびたりと其處へ立ち留つた儘動きません。彼は地面の上を見詰めてゐます。

(中略)

私は彼の眼遣いを参考にしたかつたのですが、彼は最後迄私の顔を見ないので。(下 四十一)

Kの「眼遣い」を先生は見ることでできず、どんな表情をしていたか、Kがどんな心境でいたか、知ることが出来なかつた。もう一つ場面を挙げておく。

然し突然私の名を呼ぶ聲で眼を覺しました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、其處にKの黒い影が立つてゐます。

(中略)

私は黒い影法師のやうなKに向つて、何か用かと聞き返しまし

た。Kは大した用でもない、たゞもう寐たか、まだ起きてゐるかと思つて、便所へ行つた序に聞いて見た丈だと答へました。

Kは洋燈の灯を脊中に受けてゐるので、彼の顔つきや眼つきは、全く私には分りませんでした。(下 四十三)

Kの「眼つき」を、またしても先生は見ることができない。先生はこのKの行動を奇異に感じ、Kの「覺悟」(下 四十四)を御嬢さんへの恋に進んでいく覺悟であると、受け取つてしまうのである。

(注39) Kと先生は、「眼」を使った熟語が表すとおり、擦れ違いの関係であつたということができるだろう。一方で、「私」と先生の関係を表す表現として、「眼鏡」が用いられたと考えることができるのではないだろうか。「眼鏡」の登場する場面を次に挙げていく。

①すると着物の下に置いてあつた眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白緋の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡の亡くなつたのに氣が付いたと見え、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ツ込んで眼鏡を拾ひ出した。先生は有難うと云つて、それを私の手から受け取つた。(上 三)

②私は墓地の手前にある苗畠の左側から這入つて、兩方に楓を植ゑ付けた廣い道を奥の方へ進んで入つた。すると其端れに見える茶店の中から先生らしい人がふいと出て來た。私は其人の眼鏡の縁が目に光る迄近くに寄つて行つた。そうして出拔けに「先生」と大きな聲を掛けた。先生は突然立ち留まつて私の顔を見た。

「何うして……、何うして……」

(上 五)

①で挙げた場面で「私」が先生の眼鏡を拾つて、手渡すという行為は、「私」と先生が親しくなる機会として書かれたと考えることができる。②に挙げた、墓地で先生と「私」が会う場面では、「私」が眼鏡を、先生という人間の持つ印象をかたどる一つの目印として、用いられているという見方も可能なのではないだろうか。先生の学生時代においては、先生が眼鏡を用いていたという描写は見られない。先生は眼鏡という道具を得て、過去よりも、ずっと世の中や物事がはつきりと見える状況において、「私」と出会つたのではないだろうか。「上 五」以降は、先生が眼鏡を用いている描写は見られなくなる。それは、手記の記述者である「私」が、眼鏡という道具が表す、先生の外面的な特徴や姿だけでなく、先生の心の内側を知りたいと願つて努めた結果なのではないだろうか。

第三節 先生の遺書

先生は遺書の終わりに、次のように書いている。

私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死

する積だと答へました。私の答も無論笑談に過ぎなかつたのですが、私は其時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たやうな心持がしたのです。(下 五十六)

「明治の精神」とは何を表しているのか。(注40)伊豆利彦氏は『ハムレット』における「明治の精神」とは「求道」の精神であり、そのために一切を犠牲にして精進する精神であつた。」とされている。(注41)しかし先生の言う「明治の精神」は果してそのような意味のものであつただろうか。「明治の精神」は先生独自の、言わば個人的なものとして、己に還元したものであるといえるだろう。乃木大将やKといった他の人物と、自分の人生を重ねながら、先生は死んでいったといえるのだろうか。自分の過去を見つめながら、現実の日々が過ぎていくなかで、先生は自分が生きてきた明治という時代の終焉を迎えた。『心』では、「古い」時代、「新しい」時代が意識されてゐるが、「今」という時を表す語については何が挙げられるだろう。おそらく先生は「今」を生きたことを拒否したのである。いつも先生の背後には己を掴んで離さぬKとの過去があり、「私」は先生よりも少し未来の世代を生きていく青年である。先生には、共に生きていけるはずだった静との「今」を正面から見つめて暮らしていくことはできなかった。静を愛し、愛されている実感を得ながら、先生は自分の本心を静に伝えることはしない。先生は自分がどんなに苦しんでいたかを、遺書によつて「私」に伝えようとするのではない。

それでは先生は「私」に何を伝えようとしたのか。それには先生の死の理由について考える必要がある。先生はどのような自殺の方法を選んだのだろうか。遺書においては次のように書かれている。

私は妻に残酷な驚怖を與へる事を好みません。私は妻に血の色を見せなくて死ぬ積です。妻の知らない間に、こつそり此世から居なくなるやうにします。私は死んだ後で、妻から頓死したと思はれたいのです。氣が狂つたと思はれても満足なのです。

(下 五十六)

先生がこのように考えていることについて、「ある仕官」(上 二十四)の死に方に關して「仕官のような死に方ならば、まさにうつつけのものであり、これを記述するときの漱石に先生の死に方が連想されていたのではないか。」(注42)と論じられたのは平岡敏夫氏である。先生は、自分が自殺によつてこの世から去ることを静に知られたくないのである。かつてKの自殺を目の当たりにした先生であるからこそ、置き去りにされる者の喪失感を静に味わせたくなないのである。静に血の色を見せないで死ぬ積りであるということ、は、Kの自殺の際、「襖に迸ばしつてゐる血潮」(下 四十八)を見た先生であるからこそ、同じような精神的な傷を静には負わせたく

ないと考えたためであろう。しかし一方で、「血潮」については、先生と「私」の間においても関係の深いものである。「私」は先生に対してこのように感じている。

私は東京の事を考へた。さうして漲る心臓の血潮の奥に、活動々々と打ちつゞける鼓動を聞いた。不思議にも其鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められてゐるやうに感じた。(中略)肉のなかに先生の力が喰ひ込んでゐると云つても、血のなかに先生の命が流れてゐると云つても、其時の私には少しも誇張でないやうに思はれた。(上 二十三)

一方で先生は遺書のはじめで次のように書いている。

私は其時心のうちで、始めて貴方を尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或生きたものを捕まへやうといふ決心を見せたからです。私の心臓を立割つて、温かく流れる血潮を啜らうとしたからです。(中略)私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴せかけやうとしてゐるのです。私の鼓動が停つた時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。(下 二)

かつて先生はKを人間らしくするために奥さんや御嬢さんを傍に置き、「錆付きかゝつた彼の血液を新しくしやうと試みた」(下 十五)ことがあつた。しかし、Kは自殺を図り、先生はその「襖に迸ばしつてゐる血潮」(下四十八)に「暗示された運命の恐ろしさ」(下 四十九)を深く感じる事となる。先生が、同じ「血潮」によつて、「私」が「新しい命」を得るということ述べていることは、Kに対するものと、「私」に対するものとの大きな相違が窺える。

「血潮」は、Kの実際の血潮から、先生と「私」を繋ぐ精神的なものへと変化して、最終的には先生の心の内へと帰っていくものを表していると考えられる。Kの「血潮」は実際の現象として、先生の記憶をさいなむ、恐ろしいものであり、完全に息絶えた無機質なものとこの印象を与える。それを「私」との関係においては「温かい」「下 二」という表現が為されていることに注目したい。

「血潮」そのものが命のメッセージを象徴しているなら、静に對してはどうであつただろうか。静には自分の「血の色」を見せない積りである、と先生が記したのは、やはり静に、自分の本心全てを伝えることはできないと判断したためであろう。静を愛していたからこそ、かつてKの血潮を見て、受けた衝撃を繰り返させることを避けたかったのであろう。先生は、静にだけでなく、自分の血の色を他の誰にも見せるつもりはないのである。(注 43)

先生は何故死んでいったのだらうか。先生の死の理由について、伊豆利彦氏は次のように言われている。

『こゝろ』の先生は単にKに対する罪をあがなうために死んだ

のではなかった。虚偽の生活を清算し、自ら死ぬことによってまことの生を得るために、さらには新しい生命を得て復活するために死んだのである。(中略)奥さんは先生の内部にはすこしも生きていない。そして先生の内部に生き続けているのはKの黒い影である。Kは死ぬことによって先生の内部に生き続けるたのであり、先生の運命を支配したのである。(注44)

伊豆氏はKの存在が先生の運命を死へと向かわせたという解釈をされているが、果たしてKは先生の運命を支配するほどの力を持ち得たのだろうか。先生にとってKは強大な力をもった人物のように描かれているが、Kの本質はもつと人間らしいものであり、自分の「弱さ」と、打ち砕かれるような淋しさを受け止め切れなかった。Kは御嬢さんへの恋を止めることが出来ず、「精神的な向上心」を持ち得ないことに對するひたすらの自責の念と、自分がこの世にたった独りであることを再認識しながら死んでいったのである。(注45)

先生は誰よりも、家族を欲していた人物であった。それは成人しないうちに両親を亡くしたこともきっかけと言えらるうが、先生が用意したという「華奢な食卓」「下 二十六」もまた先生の、家族を持ちたい、という気持ちを表す道具であるといえるのではないだろうか。(注46)先生は、奥さんや御嬢さんやKと暮らしていた頃、一度失った家族を取り戻したいという気持ちでいたのではないだろうか。しかし先生はまだ、自分が家長となつて、家庭を作っていくことを、まだ遠い眼で漠然と見つめていたに過ぎなかったのである。

Kが遺書の中で記した「もつと早く死ぬべきだのに何故今迄生きろうと思われる。しかし先生は、実際に、Kよりも長く生き続けてきた。先生の死について猪野謙二氏は次のように言われている。

かれはKの不自由な精神主義・人格主義を「人間らしくない」とし、これを「人間らしい」ものに変えてやろうと努力した。また他人を愛そうとし、己れの恋愛を美しく結実させようとした。しかも意外にも、そのような他人への働きかけが、「現代」においては、もはや全く無意味なものでしかないということ、そこには個々ばらばらに孤立化された、自己をも含むひとそれぞれ醜悪な―とかれには思われる―エゴイズムを見出すことしかできないということ、かような内実が、Kの死を機として、突然、天来の啓示のようにかれの心にせまってきたとき、かれにとって信ずることのできるものは、もはや自分をも信じ得ないという、かれ自身の意識そのもの以外にはなくなつた。(傍点原文)(注47)

猪野氏は、先生にとって、自分が、Kに働きかけたことが全く無意味なものでしかなかったと言われているが、そのように断じるこ

とは可能なのだろうか。先生がKを自分の下宿へと誘ったのは、ただ、Kと同じ道を辿っていきたかったからである。それは人間らしい感情の働きによるものと言えるだろう。それを全て無意味とするなら、人と人との関係は全て無意味なものになってしまふのではないだろうか。人の関係性が無為であるということのみを、『心』は訴えるものだろうか。

『心』の中で死は繰り返し描かれており、それを目撃する人物たちを見ていると、『運命』という言葉が浮かんでくる。Kの死体を目にした時の先生の気持ちは次のように語られている。

私は忽然と冷たくなつた此友達によつて暗示された運命の恐ろしさを深く感じたのです。(下 四十九)

水谷昭夫氏はこの箇所について、次のように言われている。

漱石は運命だと書いた。作品『それから』や『門』以来、くりかえしあらわれる漱石文芸のドラマを決定する、きわめて重要なことである。(中略)元来自らが責任をとり得ないようなものの、そのものとかゝわりを、なおも自らのものとしてうけとめて行く事を余儀なくされる。その生存の深淵に対する漱石の関心なのである。(注48)

水谷氏が指摘されたように、『心』において漱石は、人が自らの責任を越えたもののために、命で贖つてゆこうとする生存の深淵を覗き込み、描こうとしたのではないだろうか。先生は、親友の死を自分の生において思い起こし、反芻し、これからも生きていく積りであつた。では先生が自らの死を思い、自殺を決行する理由は何処にあるのか。

先生は、自分がこの世でいつでもたったひとりだったということ、Kの死を境に意識するようになった。それ以前から、先生は、叔父に財産を誤魔化された出来事によつて、人間を信じられなくなつていた。先生が最後に漸く気がついたのは自分の過去に捕われて自分のためだけに死ぬのではなく、誰か他の命のために自分の命を生かす方法だった。自分の命の使い方に気づいたのである。

Kは、自分一人でも「道」を進んでいくことを決心していた。「道」のため、つまり精神的な修養の意を表す「智」のために、養家を欺くほどのKであるから、そこに「情」は不要だったのである。しかし、自分が本当に独りになるということを感じ知らされたのは「情」によるもの、先生と自分に宿る恋愛の「情」によつてであつた。Kは己れの「智」を信じ、自身に生じた「情」を受け止めきれず、死んでいった人物である。それに対して先生は、よくKに対して「人間らしい」(上 三十一)という言葉を使つていた。(注49)先生は「人間の為」(下 五十四)の「情」に死んだ人物であるといえよう。遺書を書き、たった一人でも、自分の考え全てを伝えることの出来

る人物に出会えたことがKとの違いの一つといえる。先生はKの遺書の内容を汲み取ろうとし、毎月彼の墓の前に立ち、繰り返し、彼の死の真意を考えた。先生はKの死から眼を背けることをせず、命を賭して向き合ったのである。人間の生まれ持った業とも言うべきものを、深く意識しながら、先生は死んでいくのである。先生が、絶望ではなく、受容しながら、その命を閉じていったことに、「私」は「人生から教訓」(上 三十一)を受けたのであろう。

終章

始めて『心』を読んだ時から、この作品が時代を超えて読み継がれていく理由を知りたいと考えていた。『心』という作品が示唆するものについては、次に挙げる桶谷秀昭氏の意見に共感するものである。

ただ現在、わたしたちがどんな未来を指向しようとも、そしてその未来のために過去と現在を否定しようとも、すくなくとも、ほろぼし、忘れ去るべき過去の正体は何であるかを、胸の底から思い知る契機すら消失してしまつたとしたら、という戦慄に似た思いを禁じえない。『こゝろ』はそういう問いを、読み返すたびごとに投げかける作品である。(注50)

自分の生を見つめ直す機会に直面せず、ただ安穩とした生を送り、死んでゆける幸福も存在することに漱石は気づいている。しかし、自分の過去から目を背けずに見つめることを一切拒否するならば、人をやめることと同じである。自分の死だけを見つめて生きてきた先生は自分の人生を振り返り、己れの罪の在り処を探し、ついに見つけたのである。

先生の生き方がこれほどまでに「私」に感銘を与え、今でも温かい記憶として残っている理由は何であるのか。

次に、先生と「私」のある会話を挙げる。

「君、私は君の眼に何う映りますか。強い人に見えますか、弱い人に見えますか」

「中位に見えます」

此答は先生に取つて少し案外らしかった。先生は又口を閉じて、無言で歩き出した。(上 十)

先生は、自分を弱い人間であると自覚しており、「私」からもそのように言われることを予測していたのだろう。しかし先生の予想に反して「私」の答えは「中位」だったのである。おそらく先生の前で恐縮していた「私」は差しさわりのない答えを出したに過ぎないだろう。では「私」の答えは間違っていたのだろうか。「私」はその後、別の場面で、先生の、「私は是で大變執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年立つても二十年立つても忘れやしないんだから」(上 三十) という言葉を聞く場面で、「私は先生をもつと弱い人と信じてゐた。そうして其弱くて高い處に私の懐かしみの根を置いてゐた」(同)と記しているの、先生の興奮した様子を目の当たりにして、「弱くて高い」という印象を少し変化させていることがわかる。また先生は次のようにも言っている。

然し私はまだ復讐をしずにある。考へると私は個人に對する復讐以上の事を現に遣つてゐるんだ。私は彼等を憎む許りぢやない、彼等が代表してゐる人間といふものを、一般に憎む事を覺えたのだ。私はそれで澤山だと思ふ。(同)

人間を憎むということを感じたと先生は言っているが、遺書の中では、静の母を懇切丁寧に看護したことについて、次のように語っている。

是は病人自身の為でもありますし、又愛する妻の為でもあります。したが、もつと大きな意味からいふと、ついに人間の為でした。私はそれ迄にも何かしたくつて堪らなかつたのだけれども、何もする事が出来ないの、己を得ず懷手をしてゐたに違ありません。(下 五十四)

この矛盾は先生の心のうちを如実に表すものであるといえよう。どちらにもまた先生にとっては真実なのである。(注 51) 先生は、強くもなく、弱くもなく、やはり、「私」の答えの通り、「中位」であつたのであろう。先生は決して特別なのでなく、ただ、人間らしくあつただけなのである。「人間の罪」(下 五十四) は人間全体のものであることを先生は伝えている。

先生は何物にも支配されない心を手に入れたかつたのではないだろうか。それは作品中には描かれていないが、過去の罪の意識に捕われて、厭世的な気分では世の中を見渡しているだけでは見えてこなかつた、自分を肯定してやれる心ではないだろうか。

本論文を通して、漱石は先生一人に自身を投影させたものではないということが少しずつ理解できた。漱石は、Kであり、「私」であり、静でもあったのである。それぞれの人物が人間関係において苦悩し、疑念の中で生きていたことが、『心』の中で表されているからである。だからこそ、人と人の関係が、決して無意味なものではないということをも、むしろ逆説的に『心』は訴えているのだと感じられた。

注

第一章

注1 押野武志 『こゝろ』 静は果たして知っていたのか

(「アエラムック」(AERAMOOK) 41号 朝日新聞社 平成10・9 71頁)

注2 押野武志氏は注1で挙げた『こゝろ』静は果たして知っていたのか」において、「漱石はよく「恐れる男」と「恐れない女」の対比を描いたが、静もその恐れない女の系譜にある」(71頁)と述べておられる。「恐れない女」は『彼岸過迄』の須永が千代子を形容する言葉として登場する。

僕は自分と千代子を比較する毎に、必ず恐れない女と恐れる男という言葉を繰返したくなる。(中略)彼女は僕の知つてゐる人間のうちで最も恐れない一人である。だから恐れる僕を軽蔑するのである。(『彼岸過迄』須永の話十二)

注3 秋山公男 『こゝろ』の死と倫理―我執との関係―

(秋山公男著『漱石文学論考―後期作品の方法と構造―』桜楓社 昭和62・11 234頁)

注4 石原千秋 『こゝろ』のオイディプス―反転する語り―

(石原千秋著『反転する漱石』 青土社 平成9・11 198頁)

注5 寺田建 『読む お嬢さんの「笑い」―漱石『こゝろ』の一視点―』(『日本文学』 29巻7号 日本文学協会 昭和55・7 65頁)

注6 相原和邦 「補説―「こゝろ」の人物像―

(相原和邦著『漱石文学の研究―表現を軸として―』明治書院 昭和63・2 452頁、453頁)

注7 この場面での、静の「空の盃」(上 十六)という発言は、先生とKにだけでなく、「私」にも向けられているということを補足しておく。

注8 岩上順一 「こゝろ」

(岩上順一著『漱石入門』 中央公論社 昭和34・12 176頁)

注9 注8に同じ 178頁

注10 酒井英行 「『こゝろ』―「先生」への疑念―

(酒井英行著『漱石 その陰翳』 有精堂 平成2・4 261頁)

注 11 先生は「人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懐に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出来ない人」(上六)なのであり、その対象となる人物は静であり、「私」であり、静に自分の過去を打ち明けなかったという事実と呼応しているのではないだろうか。

注 12 米田利昭 「挑戦としての失敗作——『こゝろ』」

(米田利昭著『わたしの漱石』 勁草書房 平成2・8 242頁)

注 13 熊坂敦子 『『こゝろ』の世界』

(熊坂敦子著『夏目漱石の研究』 桜楓社 昭和48・3 173頁)

注 14 江藤淳 「『心』——所謂「漱石の微笑」」

(江藤淳著『決定版夏目漱石』 新潮社 昭和49・11 120頁)

第二章

注 15 「先生の卒業證書は何うしました」と私が聞いた。

「何うしたかね、——まだ何處かに仕舞つてあつたかね」と先生が奥さんに聞いた。

「えゝ、たしか仕舞つてある筈ですが」

卒業證書の在處は二人とも能く知らなかった。(上 三十二)

卒業証書を大事に扱う「私」の両親と先生夫婦とが、対照的に書かれている場面であると考えられる。

注 16 下宿時代、先生がKを出し抜こうとして、御嬢さんに結婚を申し込む以前

に、御嬢さんと奥さんが既に先生を結婚相手として考えていたと思われる場面を次に挙げる。

さつき迄傍にゐて、あんまりだわとか何とか云て笑つたお嬢さんは、何時の間にか向ふの隅に行つて、脊中を此方へ向けてゐました。私は立たうとして振り返つた時、其後姿を見たのです。後ろ姿で人間の心が讀める筈はありません。お嬢さんが此問題について何う考へてゐるか、私には見當が付きませんでした。お嬢さんは戸棚の前にして坐つてゐました。其戸棚の一尺ばかり開いてゐる隙間から、お嬢さんは何か引き出して膝の上へ置いて眺めてゐるらしかったのです。私の眼はその隙間の端に昨日買った反物の端を見付け出しました。私の着物も御嬢さんののも同じ戸棚の隅に重ねてあつたのです。(下 十八)

本人の意嚮さへたしかめるに及ばないと明言しました。(中略)

奥さんは、

「大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子を遣る筈がありませ

んから」

と云ひました。(下 四十五)

先に挙げた箇所の中の、御嬢さんが二人の反物を重ねて眺めるといふ行為は印象的である。後に挙げたのは先生が御嬢さんとの結婚を申し入れる場面であるが、奥さんはさして長考もせずに即答していることから、以前から、御嬢さんも奥さんも、先生を結婚相手として大いに認めていたということが窺える。それでも先生は「後ろ姿丈で人間の心が讀める筈はありません」(下 十八)と言っていることから、先生にだけは、本当に御嬢さんに好意を持たれているということが分らなかったのだということと言えよう。先の場面は、Kが下宿に訪れる以前の場面であることから、もし先生が御嬢さんとの結婚に踏み切ることが出来ていたなら、また小説の展開に大きく作用する場面でもあった。

注
17

次に挙げる場面にも、先生の死に対する意識が表れている。

先生は是等の墓標が現す人種々の様式に對して、私程に滑稽もアイロニ―も認めてないらしかった。私が丸い墓石だの細長い御影の碑だのを指して、しきりに彼是云ひたがるのを、始めのうちは黙つて聞いてゐたが、仕舞に「貴方は死といふ事實をまだ眞面目に考へた事がありませんね」と云つた。(上 五)

すべての人間が、死んだのちにも生きていた頃の地位を知らしめたいと願うことに、先生が否定することはない。先生には、自分の生きた証を遺したいと思う人間の心情が分かつていた。

注
18

静には子供が居らず、「私」の母であるお光には子供が居るといふことが二人の相違点であると本文で記したが、「私」を含むお光の子供たちもまた、家には関心が薄く、先生の家と同じく、「私」の家も絶えることとなる可能性は考えられる。

注
19

先生と「私」を繋ぐ表現として「遠眼鏡」を例に挙げたが、先生の方は比喩表現としての「遠眼鏡」であり、「私」の方は卒業証書を丸めて見た実物としての「遠眼鏡」が描かれていることに留意しておきたい。同じ表現が為されているが、二つの「遠眼鏡」に厳密には差異のあることが、先生と「私」が完全に一致する存在でないことを示しているように思われる。藤井淑禎氏は先生の「遠眼鏡」という表現について、先生が自身の結婚の早さについて戸惑いを示すことにおいて、「一般的にはむしろその大ききこそが「実物大」であった」(藤井淑禎『漱石文学全註釈12』若草書房 平成12・4 210頁)とされており、「先生の一人称体記述を相対化することが読者に求められていたのではないか」(同)と指摘されている。本論文の第三章第二節でも「眼」を含んだ熟語についての『心』における意味について述べている。

注 20 三浦泰生 「漱石の「心」における一つの問題」
『日本文学』 13巻5号 日本文学協会 昭和39・5 347頁

注 21 『日本国語大辞典第二版』（小学館）によると、「思いや心を同じくすること。またその思いやその人。」という意味が挙げられている。漱石はこちらの意味で使ったと考えられる。

注 22 竹盛天雄 「初出稿『心 先生の遺書』（一〇百十）を読む」
（竹盛天雄著『明治文学の脈動 鷗外・漱石を中心に』 国書刊行会 平成11・2 356頁）

注 23 山崎正和 「淋しい人間―夏目漱石」
（山崎正和著『淋しい人間』 河出書房新社 昭和53・8 13頁）

注 24 関谷由美子 『心』論―（先生）と呼ばれた男―
（関谷由美子著『漱石・藤村（主人公の影）』 愛育社 平成10・5 90（91頁）

注 25 「或は個人の有つて生れた性格の相違と云つた方が確かかもしれせん」（下 五十六）という記述からも、先生は「私」との相違をこの場面で強調しているといえる。先生に影響を受けることで「私」の考え方が変化していく、ということは窺える。しかし「私」はやはり先生と「同情的糸」（上 七）を結ぶことができる人物であり、それは先生との境遇の違いや性質の違いのある、別々の人間であつたからこそその関係であるといえよう。

注 26 注 24に同じ 90頁

注 27 注 10に同じ 263頁

酒井氏は、『こゝろ』―「先生」への疑念―において、先生について次のように述べられている。

「いったい、いつ「平生の私」から逃れられるのか。もはや死を置いて他にはない。（中略）人間は誰でも「奥には人がゐます」という関係の中にいるのであり、そこで「私の自然」（良心）が発揮できないというのであれば、その存在が悪性の「平生の私」でしかないのだ。そのような良心は理屈の上のものでしかなく、無いのと同じだ。（中略）自己否定を重ねながら、実は自信にみちた自己肯定の上に立っているのが、「先生」である。（同 264頁）

先生は、Kとの悲惨な過去を経て、遺書を書く段階となつて、「平生の私」を見つめようとしているのであり、意識的に肯定的な意味で使われている

「私の自然」という言葉とともに考えれば、「平生」という言葉自体に、自らの悔恨と内省が込められているのは明らかといえよう。それは自己否定の表れといえるのではないだろうか。

注 28

他者との関係の中で生きる人間の宿命は、「私」にも見られるものである。

私は死に瀕してゐる父の手前、其父に幾分でも安心させて遣たいと祈りつゝある母の手前、働かなければ人間でないやうにいふ兄の手前、其他妹の夫だの伯父だの叔母だのゝ手前、私のちつとも頓着してゐない事に、神経を悩まさなければならなかつた。(中 十五)

「中」においては特に、それまでそれ程深く考慮していなかつたであろう「私」が、家族に対して、また自分の将来に対して、考え、悩む描写が増えている。

注 29

先生にはへ自然の衝動が一度も働いたことがないと記したが、次のような描写があることに注意したい。

其時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。

「濟みません。私が悪かつたのです。あなたにも御嬢さんにも濟まない事になりました」

(中略)

Kに詫まることが出来ない私は、斯うして奥さんと御嬢さんに詫びなければゐられなくなつたのだと思つて下さい。つまり私の自然が平生の私を出し抜いてふら／＼と懺悔の口を開かしたのです。(下 四十九)

「私」の場合のように、運命を左右するような決定的な場面においてのへ自然の衝動は先生には見られないが、先に挙げた場面では、先生に「自然」の衝動が生まれていることも指摘しておきたい。

注 30

相原和邦 「一つの終局——こゝろ」

(相原和邦著『漱石文学の研究——表現を軸として——』明治書院 昭和 63・2

335
336
頁)

第三章

注 31

① 私は自分の過去を顧みて、あの時両親が死なずにゐて呉れたなら、少くとも父か母か何方か、片方で好いから生きてゐて呉れたなら、私はあの鷹揚な氣分を今迄持ち続ける事が出来たらうにと思ひます。(下 三)

② もし彼の實の母が生きてゐたなら、或は彼と實家との關係に、斯うまで隔りが出来ずに濟んだかも知れないと私は思ふのです。(下 二十一)

①、②で挙げた「もし／＼だったなら」という仮定条件の中での非現実仮定の言い方によって、偶然のように見える過去が、二人に共通する必然のものとして意味を為し、人の力でどうすることもできない運命のように、現実が二人に

重く覆い被さっていることが窺える。その他にも『心』の中で見られる「もし」の文章を挙げておく。

「Kさんが生きてゐたら、貴方もそんなにはならなかつたでせう」（下 五十三）

非現実仮定の言い方であり、この静の言葉ももう取り返しのつかない過去を述懐する気持ちを示しており、しかも真実を指摘している。

妻の笑談を聞いて始めてそれを思ひ出した時、私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積だと答へました。（下 五十六）
この先生の言葉は単なる仮定に留まらず、自殺として実行されることとなることとなる。『心』における「もし」という文章には、登場人物たちの心情が強く表れているといえよう。

注 32 先生がKを下宿先に連れてくる以前の場面において、次のような先生の述懐が書かれている。

一 圖な彼は、たとひ私がいくら反対しやうとも、矢張自分の思ひ通りを貫いたに違ひなからうとは察せられます。然し萬一の場合、賛成の聲援を與へた私に、多少の責任が出来てくる位の事は、子供ながら私はよく承知してゐた積です。よし其時にそれ丈の覺悟がないにしても、成人した眼で、過去を振り返る必要が起つた場合には、私に割富られただけの責任は、私の方で帯びるのが至富になる位な語氣で私は賛成したのです。（下 十九）

この場面で既に先生は、Kが養家を欺き自分の道を貫くことに、同意したことについて、自分の責任を自覺している。

注 33 「不思議にも彼は私の御嬢さんを愛してゐる素振に全く氣が付いてゐないやうに見えました」（下 二十八）

この文章から、Kが先生の御嬢さんへの気持ちに氣が付かないのと同時に、先生もKが御嬢さんを愛していたことに氣がつかなくかつたという逆の見方も可能である。

注 34 越智治雄 「こゝろ」
（越智治雄著『漱石私論』 角川書店 昭和46・6 282頁）

注 6 に同じ

449頁

注 36 『草枕』の冒頭の文を次に引用する。

山路を登りながら、かう考へた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。『草枕』（一）

「智」と「情」はそれぞれ「頭」と「胸」に言い換えることができる。「私」は先生との関係について、「たゞ頭といふのはあまりに冷か過ぎるから私は胸と云ひ直したい」（上 二十三）と記しており、先生と「情」の通った人間らしい付き合いの出来たことを喜びとしている。

注 37

重松泰雄

「こゝろ」を読む・Kの意味―その変貌をめぐって―

（重松泰雄著『漱石その歷程』 おうふう 平成6・3

328頁）

注 38

注 37に同じ

335頁

注 39

先生がKに対して使った「覺悟」（下 四十二）が御嬢さんへの恋を止める意だったことに對し、Kが使った「覺悟」（同）を、先生が恋に進む覺悟ととったことが修復不可能な擦れ違いを生んでいる。Kが発した「覺悟」は、自分の死に對する決意であつた。

注 40

「明治の精神」についての研究者のいくつかの意見を次に挙げておく。

平岡敏夫氏は次のように言われている。

「屈辱と損害」の執念があればこそ先生の内面に「苦しい戦争があつた」のであり、その解決は死の道しかなかった。天皇崩御による「明治の精神」の自覚はそこに訪れる。自責と外（他）責の葛藤を、自責による死の方向だけでは、外（他）責あるゆえに解決できなかった先生は、ここに他責の方向による死、すなわち「明治の精神」への殉死という道を発見したのである。「屈辱と損害」の執念は「明治の精神」に救いとられたのである。ここに先生の葛藤のやむとき、すなわち自責と他責を満たす自殺が可能となつた。

（注 39に同じ 354頁）

桶谷秀昭氏は次のように言われている。

「自由と独立と己れに充ちた現代」が、先生が殉死したあの「明治の精神」の総体を意味するものではない。それは「明治の精神」の一面であり、他の一面は、「自由と独立と己れ」のいわば「自己本位」の精神の犠牲となり、寂寞に襲われざるをえない淋しい「明治の精神」である。

桶谷秀昭「淋しい「明治の精神」―『こゝろ』」

（桶谷秀昭著『夏目漱石論』河出書房新社 昭和51・6 185頁）

注 41

伊豆利彦「夏目漱石と「明治の精神」」

（伊豆利彦著『漱石と天皇制』 有精堂 平成2・9

308頁）

注 42 平岡敏夫「『こゝろ』——「明治の精神」を中心に——」

(平岡敏夫著『漱石研究』 有精堂 昭和62・9 344頁)

「自分で病氣に罹つてゐながら、氣が付かないで平氣であるのがあの病の特色です。私の知つたある仕官は、とうくそれで遣られたが、全く嘘のやうな死に方をしたんですよ。何しろ傍に寝てゐた細君が看病する暇もなんにもない位なんですからね。夜中に一寸苦しいと云つて、細君を起したぎり、翌る朝はもう死んでゐたんです。しかも細君は夫が寝てゐるとばかり思つてたんだつて云ふんだから」(上 二十四)

平岡氏の同論文によつて既に指摘されているが、この「ある仕官」だけに限らず、明治天皇をはじめ、御嬢さんの母である奥さんが腎臓病で亡くなり、「私」の父も同じ病で危篤に陥ることも確認しておきたい。

注 43 先生が己れの血の色を誰にも見せる積もりはないということは、自分の死

を自分の中だけで決着しようという心の表れではないだろうか。その一方で、先生が精神的な意味での自分の血潮を、「私」に浴びせようとしていたということは遺書の中から窺える。

注 44 注 41に同じ 344頁 345頁

注 45 第三章第一節で既に述べているが、Kは先生と房総を旅行した時に、既に死を意識しているのであり、先生がいくらKを出し抜いて御嬢さんに結婚を申し込んだということを悔いていても、やはりKの死の原因はK自身にあるものだと考える。

注 46 石崎等「ちやぶ台のメタファー」 (石崎等著『漱石の方法』 有精堂 平成2・7 283頁)

石崎氏は同論文において次のように言われている。

先生が床と棚のある書院構えの八畳で膳の食事を摂っていたとき、それは下宿人Ⅱ客としての身分にすぎなかった。それが、六畳の茶の間でちやぶ台を囲んで(奥さん)(お嬢さん)と一緒に食事をするようになったとき、そこには明らかに「客扱ひ」を超えた疑似家族関係が生じたのである。さらにそこにKが加わることは、悲劇を胚胎させることを意味した。先生が(奥さん)の家になじみ、まがりなりにも家族の核とならざるを得ないとき、Kは不可避免的に排除されねばならない存在となる。(お嬢さん)をめぐる先生とKとの心理的な角逐が顕著になったとき、一同に集まる食事時間には、小さなちやぶ台の上でさまざまな思いの眼差が交錯する。

石崎氏が言われる通りに、ちやぶ台の上では一斉に集う場として、先生、奥さん、御嬢さん、Kの様々な思いが交錯していると考えられる。しかし先生は、下宿生活をより円滑にしようとして、「わざわざ」御茶の水の家具屋へ行つて、私の工夫通りにそれを造り上させた」(下 二十六)のであつて、結果的に家族のような形態のようになったということが考えられる。それは先生が無意識のうちに家族という形態を強く希求していたためではないだろうか。

注 47 猪野謙二『心』における自我の問題」

(猪野謙二著『明治の作家』 岩波書店 昭和41・11 134頁)

注 48 水谷昭夫『心』の世界」

(水谷昭夫著『漱石文芸の世界』 桜楓社 昭和49・2 176頁)

注 49 先生の使う「人間らしい」という言葉に「情」の意味が含まれていると思われる。しかし同じ言葉の中に、利己主義を表す意味も含まれていることに、今の先生なら気づいているのだろう。

終章

注 50 注 40に挙げた桶谷秀昭氏の論文に同じ

178頁)

注 51 先生にとってどちらも真実であつたという描写が、次に挙げる例にも見られる。

貴方は定めて變に思ふでせう。其私が其處の御嬢さんを何うして好く餘裕を有てゐるか。其御嬢さんの下手な活花を、何うして嬉しがつて眺める餘裕があるか。同じく下手な其人の琴を何うして喜んで聞く餘裕があるか。さう質問された時、私はたゞ兩方共事實であつたのだから、事實として貴方に教へて上げるといふよりは外に仕方がないのです。(下 十二)

私の煩悶は、奥さんと同じやうにお嬢さんも策略家ではなからうかといふ疑問に會つて始めて起るのです。(中略)それでゐて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑はなかつたのです。だから私は信念と迷ひの途中に立つて少しも動く事が出来なくなつて仕舞ひました。私には何方も想像であり、又何方も眞實であつたのです。(下 十五)

二つの異なつた心情が自身の中に混在し、また双方ともが眞実であると先生が認めていることが、揺れ動く矛盾を抱えた人の心の眞実を捉えているとは考えられないだろうか。

参考文献目録

テキスト

漱石全集 全18巻

岩波書店

玉井敬之・鳥井正晴・木村功編 『夏目漱石集「心」』

和泉書院

単行本

夏目鏡子述・松岡譲筆録『漱石の思ひ出』	岩波書店	昭和4・10
瀧澤克己著 『夏目漱石』	清水書房	昭和21・9
荒正人著 『評伝夏目漱石』	実業之日本社	昭和30・7
岡崎義恵著 『漱石と微笑』	東京ライフ社	昭和31・2
唐木順三著 『夏目漱石』	修道社	昭和31・7
板垣直子著 『漱石文学の背景』	鱒書房	昭和31・7
夏目伸六著 『父夏目漱石』	文藝春秋新社	昭和31・11
岩上順一著 『漱石入門』	中央公論社	昭和34・12
猪野謙二著 『明治の作家』	岩波書店	昭和41・11
高木文雄著 『漱石の道程』	審美社	昭和41・12
水谷昭夫著 『近代日本文芸史の構成』	桜楓社	昭和43・5
片岡良一著 『夏目漱石の作品』	鷺の宮書房	昭和43・11
瀬沼茂樹著 『夏目漱石』	東京大学出版会	昭和45・7
越智治雄著 『漱石私論』	角川書店	昭和46・6
江藤淳著 『決定版 夏目漱石』	新潮社	昭和49・11
熊坂敦子著 『夏目漱石の研究』	桜楓社	昭和48・3
水谷昭夫著 『漱石文芸の世界』	桜楓社	昭和49・2
桶谷秀昭著 『夏目漱石論』	河出書房新社	昭和51・6
平岡敏夫著 『漱石序説』	塙書房	昭和51・10
玉井敬之著 『夏目漱石論』	桜楓社	昭和51・10
平岡敏夫著 『明治文学史の周辺』	有精堂	昭和51・11
山崎正和著 『淋しい人間』	河出書房新社	昭和53・8
坂本浩著 『夏目漱石―作品の深層世界』	明治書院	昭和54・4
相原和邦著 『漱石文学―その表現と思想―』	塙書房	昭和55・7
三好行雄編 『鑑賞日本現代文学 第五巻 夏目漱石』	角川書店	昭和59・3
高田瑞穂著 『夏目漱石論―漱石文学の今日的意義―』	明治書院	昭和59・8
越智治雄著 『漱石と文明 文学論集2』	砂子屋書房	昭和60・8
松元寛著 『夏目漱石―現代人の原像』	新地書房	昭和61・6
佐藤泰正著 『夏目漱石論』	筑摩書房	昭和61・11

平岡敏夫著	『漱石研究』	有精堂	昭和62・9
坂口曜子著	『魔術としての文学―夏目漱石論―』	沖積舎	昭和62・10
秋山公男著	『漱石文学論考―後期作品の方法と構造―』	桜楓社	昭和62・11
相原和邦著	『漱石文学の研究―表現を軸として―』	明治書院	昭和63・2
小森陽一著	『構造としての語り』	新曜社	昭和63・4
小倉脩三著	『夏目漱石ウィリアム・ジェームズ受容の周辺』	有精堂	平成元・2
大岡昇平著	『小説家夏目漱石』	筑摩書房	平成元・5
山本勝正著	『夏目漱石文芸の研究』	桜楓社	平成元・6
石崎等著	『漱石の方法』	有精堂	平成元・7
伊豆利彦著	『漱石と天皇制』	有精堂	平成元・9
酒井英行著	『漱石 その陰翳』	有精堂	平成2・4
西垣勤著	『漱石と白樺派』	有精堂	平成2・6
米田利昭著	『わたしの漱石』	勁草書房	平成2・8
佐々木英昭著	『夏目漱石と女性―愛させる理由―』	新展社	平成2・12
佐々木充著	『漱石推考』	桜楓社	平成4・1
江藤淳著	『漱石論集』	新潮社	平成4・4
有精堂編集部編	『日本文学史を読むⅤ 近代Ⅰ』	有精堂	平成4・6
柄谷行人著	『漱石論集成』	第三文明社	平成4・7
松岡陽子マックレイン著	『孫娘から見た漱石』	新潮社	平成5・2
佐古純一郎著	『夏目漱石の文学』	朝文社	平成5・3
重松泰雄著	『漱石 その歷程』	おうふう	平成6・3
佐藤泰正著	『佐藤泰正著作集①漱石以後Ⅰ』	翰林書房	平成6・4
芳川泰久著	『漱石論―鏡あるいは夢の書法』	河出書房新社	平成6・5
多田道太郎著	『多田道太郎著作集5 現代風俗ノート』	筑摩書房	平成6・6
重松泰雄著	『漱石 その新たな地平』	おうふう	平成7・5
安東璋二著	『私論夏目漱石―行人を軸として―』	桜楓社	平成7・11
赤井恵子著	『漱石という思想の力』	朝文社	平成8・11
小森陽一著	『構造としての語り』	新曜社	平成9・11
石原千秋著	『反転する漱石』	青土社	平成9・11
関谷由美子著	『漱石・藤村（主人公）の影』	愛育社	平成10・5
赤井恵子著	『漱石という思想の力』	朝文社	平成10・11
大岡信著	『拝啓漱石先生』	世界文化社	平成11・2
竹盛天雄著	『明治文学の脈動 鷗外・漱石を中心に』	国書刊行会	平成11・2
武田勝彦著	『漱石の東京(Ⅱ)』	早稲田大学出版部	平成12・2
荻原桂子著	『夏目漱石の作品研究』	花書院	平成12・3
佐藤裕子著	『漱石解説―（語り）の構造』	和泉書院	平成12・5

水川隆夫著	『漱石と仏教―則天去私への道』	平凡社	平成12・9
小森陽一・石原千秋編	『漱石を語る2』	翰林書房	平成12・12
佐藤泰正著	『佐藤泰正著作集②漱石以後II』	翰林書房	平成13・6
吉本隆明著	『夏目漱石を読む』	筑摩書房	平成14・11
八木良夫著	『夏目漱石論―『それから』から『明暗』を中心に―』丸善大阪出版サービスセンター		平成15・8
秋山豊著	『漱石という生き方』	トランスビュー	平成18・5
高橋英夫	『洋燈の孤影 漱石を読む』	幻戯書房	平成18・7
水川隆夫著	『漱石「こころ」の謎』	彩流社	平成元・10
玉井敬之・藤井淑禎編	『漱石作品論集成 第十巻 こころ』	桜楓社	平成3・4
盛忍著	『漱石「こころ」論』	作品社	平成14・10
遠藤祐注釈	『日本近代文学大系 第27巻 夏目漱石集IV』	角川書店	昭和49・2
藤井淑禎注釈	『漱石文学全注釈12』	若草書房	平成12・4

単行本所収論文

瀧澤克己	『こころ』	(瀧澤克己著 『夏目漱石』)	清水書房	昭和21・9
荒正人	『心』	(荒正人著 『評伝夏目漱石』)	実業之日本社	昭和30・7
岡崎義恵	『心』	(岡崎義恵著 『漱石と微笑』)	東京ライフ社	昭和31・2
唐木順三	『こころ』	(唐木順三著 『夏目漱石』)	修道社	昭和31・7
板垣直子	『こころ』における「近代文芸」の技術の応用	(板垣直子著 『漱石文学の背景』)	鱗書房	昭和31・7
岩上順一	『こころ』	(岩上順一著 『漱石入門』)	中央公論社	昭和31・11
猪野謙二	『心』における自我の問題	(猪野謙二著 『明治の作家』)	岩波書店	昭和41・11
高木文雄	「ゆるめ」の必要―『心』	(高木文雄著 『漱石の道程』)	審美社	昭和41・12
水谷昭夫	『こころ』の世界	(水谷昭夫著 『近代日本文芸史の構成』)	桜楓社	昭和43・5
片岡良一	『行人』と『こころ』の実験	(片岡良一著 『夏目漱石の作品』)	鷺の宮書房	昭和43・11
瀬沼茂樹	『こころ』	(瀬沼茂樹著 『夏目漱石』)	東京大学出版会	昭和45・7
越智治雄	『こころ』	(越智治雄著 『漱石私論』)	角川書店	昭和46・6
熊坂敦子	『こころ』の世界	(熊坂敦子著 『夏目漱石の研究』)	桜楓社	昭和48・3
水谷昭夫	『心』の世界	(水谷昭夫著 『漱石文芸の世界』)	桜楓社	昭和49・2
江藤淳	『心』―所謂「漱石の微笑」	(江藤淳著 『決定版夏目漱石』)	新潮社	昭和49・11
桶谷秀昭	『淋しい「明治の精神」―『こころ』』	(桶谷秀昭著 『夏目漱石論』)	河出書房新社	昭和51・6
平岡敏夫	『こころ』の漱石	(平岡敏夫著 『漱石序説』)	塙書房	昭和51・10
平岡敏夫	『漱石の文明批評』	(平岡敏夫著 『明治文学史の周辺』)	有精堂	昭和51・11

山崎正和	「淋しい人間―夏目漱石」	(山崎正和著 「淋しい人間」)	河出書房新社	昭和53・8)
坂本浩	「こころ」の世界―懺悔と贖罪―	(坂本浩著 「夏目漱石―作品の深層世界」)	明治書院	昭和54・4)
三好行雄	「こころ」(三好行雄著「鑑賞日本現代文学 第五巻 夏目漱石」)		角川書店	昭和59・3)
高田瑞穂	「こころ」による生の終結	(高田瑞穂著「夏目漱石論―漱石文学の今日的意義―」)	明治書院	昭和59・8)
越智治雄	「漱石の思想の展開」(越智治雄著「漱石と文明 文学論集2」)		砂子屋書房	昭和60・8)
松元寛	「こころ」論―〈自分の世界〉と〈他人の世界〉のはざま―	(松元寛著 「夏目漱石―現代人の原像」)	新地書房	昭和61・6)
佐藤泰正	「こころ」―〈命根〉を求めて―(佐藤泰正著「夏目漱石論」)		筑摩書房	昭和61・11)
平岡敏夫	「こころ」―「明治の精神」を中心に―	(平岡敏夫著「漱石研究」)	有精堂	昭和62・9)
秋山公男	「こころ」の死と倫理―我執との相関―		桜楓社	昭和62・11)
秋山公男	「こころ」の方法と構造	(秋山公男著「漱石文学論考―後期作品の方法と構造―」)	桜楓社	昭和62・11)
秋山公男	「こころ」の方法と構造	(秋山公男著「漱石文学論考―後期作品の方法と構造―」)	桜楓社	昭和62・11)
相原和邦	「こころ」の終局―「こころ」	(相原和邦著「漱石文学の研究―表現を軸として―」)	明治書院	昭和63・2)
相原和邦	「補説―「こころ」の人物像」	(相原和邦著「漱石文学の研究―表現を軸として―」)	明治書院	昭和63・2)
相原和邦	「懷疑と信愛―「こころ」	(相原和邦著「漱石文学の研究―表現を軸として―」)	明治書院	昭和63・2)
小森陽一	「心」における反転する〈手記〉―空白と意味の生成―	(小森陽一著 「構造としての語り」)	新曜社	昭和63・4)
玉井敬之	「こころ」二題	(玉井敬之著 「漱石研究への道」)	桜楓社	昭和63・6)
小倉修三	「こころ」論―先生の死をめぐる―	(小倉修三著 「夏目漱石ウィリアム・ジェームズ受容の周辺」)	有精堂	平成元・2)
大岡昇平	「こころ」の構造	(大岡昇平著 「小説家夏目漱石」)	筑摩書房	平成元・5)
山本勝正	「こころ」論	(山本勝正著 「夏目漱石文芸の研究」)	桜楓社	平成元・6)
石崎等	「ちやぶ台のメタファー」	(石崎等著 「漱石の方法」)	有精堂	平成元・7)
伊豆利彦	「夏目漱石と「明治の精神」	(伊豆利彦著 「漱石と天皇制」)	有精堂	平成元・9)
酒井英行	「こころ」―「先生」への疑念―(酒井英行著「漱石その陰翳」)		有精堂	平成2・4)
西垣勤	「こころ」	(西垣勤著 「漱石と白樺派」)	有精堂	平成2・6)
米田利昭	「挑戦としての失敗作―「こころ」(米田利昭著「わたしの漱石」)		勁草書房	平成2・8)
佐々木英昭	「御嬢さんの笑い―小森―秦説の脱構築」		新典社	平成2・11)

佐々木充	「親のない子供の物語―『虞美人草』と『ころろ』―」	(佐々木充著『漱石推考』)	桜楓社	平成4・1)
江藤淳	「漱石―『心』以後」	(江藤淳著『漱石論集』)	新潮社	平成4・4)
藤井淑禎	「甦る『ころろ』―昭和三十八年の読者と社会」	(有精堂編集部編『日本文学史を読むⅤ 近代Ⅰ』)	有精堂	平成4・6)
柄谷行人	「淋しい『明治の精神』」	(柄谷行人著『漱石論集成』)	第三文明社	平成4・9)
佐古純一郎	「ころろ」	(佐古純一郎著『夏目漱石の文学』)	朝文社	平成5・3)
重松泰雄	「ころろ」を読む・Kの意味―その変貌をめぐって―」	(重松泰雄著『漱石 その暦程』)	おうふう	平成6・3)
佐藤泰正	「ころろ」再見 テクスト論的解説へのひとつの問い」	(佐藤泰正著『佐藤泰正著作集①漱石以後Ⅰ』)	翰林書房	平成6・4)
芳川泰久	「声」の検閲―『ころろ』の語法を聴く」	(芳川泰久著『漱石論―鏡あるいは夢の書法』)	河出書房新社	平成6・5)
多田道太郎	「昔、ちやぶ台というものがあつた」	(多田道太郎著『多田道太郎著作集5 現代風俗ノート』)	筑摩書房	平成6・6)
重松泰雄	「ころろ」の二十の「景観」―非注釈的注釈への試み―」	(重松泰雄著『漱石 その新たな地平』)	おうふう	平成7・5)
安東璋二	「漱石の転相―『ころろ』の変容から『道草』へ」	(安東璋二著『私論夏目漱石―『行人』を基軸として―』)	桜楓社	平成7・11)
赤井恵子	「『心』への疑い―呪縛の言説―」(赤井恵子著『漱石という思想の力』)		朝文社	平成8・11)
小森陽一	「『心』における反転する〈手記〉」(小森陽一著『構造としての語り』)		新曜社	平成9・11)
石原千秋	「高等教育の中の男たち『ころろ』」(石原千秋著『反転する漱石』)		青土社	平成9・11)
石原千秋	「眼差としての他者―『ころろ』」(石原千秋著『反転する漱石』)		青土社	平成9・11)
石原千秋	「ころろ」のオイディプス―反転する語り―」	(石原千秋著『反転する漱石』)	青土社	平成9・11)
関谷由美子	「『心』論―〈先生〉と呼ばれた男―」	(関谷由美子著『漱石・藤村〈主人公〉の影』)	愛育社	平成10・5)
大岡信	「漱石と則天去私『彼岸過迄』『行人』『ころろ』」	(大岡信著『拝啓漱石先生』)	世界文化社	平成11・2)
竹盛天雄	「初出稿『心 先生の遺書』(二―百十)を読む」	(竹盛天雄著『明治文学の脈動 鷗外・漱石を中心に』)	国書刊行会	平成11・2)
武田勝彦	「ころろ」(武田勝彦著『漱石の東京Ⅱ』)		早稲田大学出版会	平成12・2)
荻原桂子	「『心』論―愛の再生」	(荻原桂子著『夏目漱石の作品研究』)	花書院	平成12・3)
佐藤裕子	「漱石後期作品の構造―『ころろ』論」	(佐藤裕子著『漱石解説―〈語り〉の構造』)	和泉書院	平成12・5)
水川隆夫	「『心』と浄土真宗」(水川隆夫著『漱石と仏教―則天去私への道』)		平凡社	平成12・9)

佐藤泰正	「漱石研究史論・素描『こころ』を軸として」			翰林書房	平成13・6
吉本隆明	「佐藤泰正著『佐藤泰正著作集②漱石以後Ⅱ』				
	「資質をめぐる漱石『こころ』」			筑摩書房	平成14・11
	（吉本隆明著『夏目漱石を読む』				
秋山豊	「心」と「こころ」			トランスビュー	平成18・5
	（秋山豊著『漱石という生き方』				
高橋英夫	「漱石と「自然」」				
	（高橋英夫『洋燈の孤影 漱石を読む』			幻戯書房	平成18・7
雑誌掲載論文					
三浦泰生	「漱石の「心」における一つの問題」				
	（『日本文学』	13巻5号		日本文学協会	昭和39・5
三浦泰生	「教材という観点から見た「心」―教材論への一つの試み―」				
	（『日本文学』	17巻5号		日本文学協会	昭和43・5
越智治雄	「夏目漱石『こころ』」				
	（『国文学解釈と教材の研究』	14巻8号		学燈社	昭和44・6
山本勝正	「漱石『こころ』の世界―〈先生〉の死の意味をめぐる―」				
	（『日本文芸研究』	24巻4号		関西学院大学日本文学会	昭和47・12
平岡敏夫	「漱石における「子供の死」」				
	（『国文学解釈と鑑賞』	43巻11号		至文堂	昭和52・11
寺田健	「読む お嬢さんの「笑い」―漱石『こころ』の一視点―」				
	（『日本文学』	29巻7号		日本文学協会	昭和55・7
小森陽一	「こころの行方」―（『成城国文学』	3号		成城国文学会	昭和62・3
リービ英雄	「猿股の西洋人―『こころ』の一描写について」				
	（『群像』	43巻2号		講談社	昭和63・2
三好行雄	「ワトソンは背信者か―『こころ』再説―」				
	（『文学』	56巻5号		岩波書店	昭和63・5
中本友文	「『こころ』の「私」―漱石の一人称小説の〈語り〉」				
	（『高知大学学術研究報告 人文科学その1』	38巻		高知大学	平成元・12
関谷由美子	「『心』論―〈作品化〉への意思―」				
	（『日本近代文学』	43集		日本近代文学会	平成2・10
押野武志	「『静』に声はあるのか―『こころ』における抑圧の構造―」				
	（『季刊 文学』	3巻4号		岩波書店	平成2・10
松下浩幸	「『こころ』論―〈孤児〉と〈新しい女〉―」				
	（『明治大学日本文学』	20号		明治大学日本文学研究會	平成4・8
石井和夫	「『こころ』の田の様式」				
	（『紋説』	7号		紋説舎	平成5・1

浅田隆	「漱石『こころ』論・素描―「静」の「純白」をめぐって―」 〔「枯野」〕	10号	枯野の会	平成5・6
石崎等	「こころの場所、家の場所―『こころ』について―」 〔「漱石研究」〕	6号	翰林書房	平成8・5
秦恒平	「講演 漱石『心』のことなど―わが文学の心根に―」 〔「學苑」〕	683号	昭和女子大学近代文化研究所	平成9・1
押野武志	「『こころ』静は果たして知っていたのか」 〔「アエラムック (AERAMOOK)」〕	41号	朝日新聞社	平成10・9
江藤正顕	「海辺と基地 封印された『こころ』」 〔「敍説」〕	18号	花書院	平成11・1
篠崎美生子	「『こころ』―闘争する「書物」たち―」 〔「日本近代文学」〕	60集	日本近代文学会	平成11・5
松澤和宏	「『心』における公表問題のアポリア―虚構化する手記―」 〔「日本近代文学」〕	61集	日本近代文学会	平成11・10
児玉千夏	「静の笑い―その心情の一考察―」 〔「国文学報」〕	43号	尾道短期大学国文学会	平成12・3
山本芳明	「漱石評価転換期の分析―『こころ』から漱石の死まで―」 〔「文学 隔月刊」〕	1巻2号	岩波書店	平成12・3
石原千秋	「夏目漱石をどう読むか?―「いま」を読むこと―」 〔「国文学解釈と鑑賞」〕	66巻3号	至文堂	平成13・3
渡部芳紀	「『こころ』―その舞台―」 〔「国文学解釈と鑑賞」〕	66巻3号	至文堂	平成13・3
宗像和重	「『こころ』を読んだ小学生―松尾寛一宛漱石書簡をめぐって―」 〔「文学 隔月刊」〕	2巻4号	岩波書店	平成13・7
関谷由美子	「『こころ』の第三の手記―「貴方に会ひたかつたのです」―」 〔「月刊国語教育」〕	21巻9号	東京法令出版	平成13・11
岸本次子	「夏目漱石の自然描写―『彼岸過迄』『行人』『こころ』を中心に―」 〔「かほよとり」〕	9号	武庫川女子大学大学院文学研究科	平成13・12
首藤基澄	「『仕方がない』先生の心―漱石『こころ』私解―」 〔「国語国文学研究」〕	37号	熊本大学文学部国語国文学会	平成14・2
徳永光展	「小説時間と年齢確定をめぐって―夏目漱石『心』読解への前提―」 〔「比較文化」〕	8巻	宮崎国際大学	平成14・12
細川正義	「夏目漱石『こころ』論―漱石文芸における『こころ』の意義―」 〔「人文論究」〕	52巻3号	関西学院大学人文学会	平成14・12
佐藤泰正	「漱石探求―『こころ』から何が見えて来るか」 〔「日本文学研究」〕	38号	梅光女学院大学日本文学会	平成15・2

- 石井和夫 「漱石の『こゝろ』」
 (「江古田文学」 52号 江古田文学会 平成15・2)
- 平岡敏夫 「『こゝろ』―佐幕派的なものの終結―盛忍『漱石「こゝろ」論』を介して」
 (「江古田文学」 52号 江古田文学会 平成15・2)
- 藤井淑禎 「『自白の書』としての『心』」
 (「江古田文学」 52号 江古田文学会 平成15・2)
- 仲秀和 「漱石『こゝろ』研究史(八)―平成六年以降の研究を巡って―」
 (「大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要」 3号 大阪樟蔭女子大学学術研究会 平成16・1)
- 千種キムラスティープン 「『こゝろ』の世界―男たちの性の争い、知の過信、動けない女」
 (「国文学解釈と鑑賞」 70巻6号 至文堂 平成17・6)
- 村瀬士朗 「同人雑誌の時代と夏目漱石―特権化される文学―」
 (「国際文化学部論集」 6巻2号 鹿児島国際大学国際文化学部 平成17・9)